

ナリトシ、敢テ顧念スル所ナカリシモ、其ノ實、鐵炭ニ富ミ、木材ニ富ミ、牧場ニ富メル等、露國將來ノ富庫ハ、西伯利亞ニ因テ保持セラル、ヤモ未タ知ルヘカラサルノ富饒ヲ藏セリ、況ンヤ前段論スル所ノ如キ大鐵道ノ成功ニ依リ、以テ露京聖彼得堡ヨリ、浦鹽斯德ニ至ルマテ、一貫ニ貫通セハ、其ノ商業上及ヒ兵力上ニ於テ、世界各國、殊ニ我カ東洋諸國カ、其ノ利害ノ反對ニ於テ、直接ノ影響ヲ感スルコト、實ニ鮮少ニアラサルヘシ、況ンヤ中央亞細亞ノ問題、毎ニ英ト衝突スルモノアルニ於テチヤ。次ニ彼ノ英國ヲ見ヨ、其ノ本國ノ地勢タル、歐洲大陸ノ西北海中、二箇ノ島嶼ヨリ成レルト雖モ、其ノ所屬版圖ノ廣大ナルコト、大約一百五十萬方哩、全世界中、殆ント至ラサル所ナシ、宜ナル哉英人其ノ版圖ノ廣大ヲ誇稱シテ「其ノ版圖内ニハ太陽嘗テ没スルコトナシ」ト云ヘルコトヲ、加之、政治、商業、文學、工藝等ノ上ニ於テモ、其ノ進歩ノ程度頗ル高く、爲メニ世界各國ニ於ケル文明富強ノ好模範ナリト稱揚セラル、ニ至ル、而カモ斯クノ如ク英國カ世界各國ニ威勢ヲ伸ヘテ、其ノ領地ヲ擴充センコトニ汲々タル中ニモ、既往、我カ亞細亞ノ局面ニ向テ、其ノ威福ヲ恣ニシタルコト幾許

ソ、顧フニ今ヲ去ル僅カニ五十餘年前、即チ西曆紀元千八百四十年代ノ頃ニ於テ、彼ノ有名ナル鴉片戰爭ノ起ルヤ、其ノ原因タル、英國ノ商船、鴉片ヲ支那ニ輸シテ茶ト交換シ、支那政府屢之レテ禁スレトモ、其ノ令行ハレサルヨリ、兩廣ノ都督ハ、英人ノ密カニ國禁ヲ犯スヲ憤リ、自ラ兵ヲ幸ヒテ英ノ商館ヲ圍ミ、其ノ商人ヲ逐フテ鴉片ニ萬餘函ヲ奪ヒ、之レヲ燒棄シタルニ、英人等大ニ其ノ暴虐ヲ憤懣シ、英國政府モ亦之レヲ然リトシ、其ノ人民ノ訴ヲ納レテ、直チニ之レヲ詰問セシト雖モ、支那政府ハ頑然トシテ之レニ應スルコトナカリシヨリ、英國政府大ニ憤リ、遂ニ其ノ艦隊ヲ派シテ支那ノ海港ヲ砲撃シ、兩國互ヒニ勝敗アリ、且ツ前後互ヒニ和ヲ講セントシタルモ事成ラス、幾多ノ戰爭、支那大ニ避易シ、終ニ一千八百四十二年、支那帝親ヲ手書ヲ出シテ和ヲ請フニ及ヒ、英國政府ハ其ノ償金トシテ、六百萬磅及ヒ香港全島ヲ支那ヨリ得、且ツ廈門、福州、上海、寧波、廣東ノ五港ヲ開カシムルニ至レリ、然ルニ又タ久シカラスシテ、支那官吏再ビ暴ヲ英商ニ加ヘ、且ツ基督教徒ヲ虐待セシヨリ、兩國間更ラニ一大軋轢ヲ生シ、一千八百五十八年、彼ノ天津條約ヲ訂結スルニ及ンテ、一旦和

ヲ講シタリト雖モ、翌年六月英佛二國ノ公使、支那帝ノ押署ヲ得ンカ爲メ、相ヒ伴フ
 テ北京ニ到ラントスルニ、支那人又々不意ニ其ノ衛兵ヲ襲撃セシヨリ、二國ノ政府大
 ニ怒リ、更ラニ出兵シテ支那海岸ノ諸港ヲ陷レ、進テ北京ヲ陷レシヨリ、支那帝ハ皇
 妃諸王ト共ニ亂ヲ熱河ニ避ケテ和ヲ請ヒ、英國政府ノ要求ヲ容レ、大沽遭難者ノ爲メ
 ニ十萬磅ノ償金及ヒ、同盟軍ノ軍費ノ爲メニ八百萬兩ノ金額ヲ出タシ、且ツ過當ノ要
 求ヲ容レ、先キニ訂結セル天津條約ヲ確守スヘキコトヲ約シテ、三國ノ兵始メテ解散
 スルニ至レリ、斯クノ如ク英國カ事ヲ好ンテ其ノ威福ヲ恣マニシ、亞細亞第一ノ巨大
 帝國ト悶着シテ、其ノ領地ヲ奪フカ如キハ、實ニ驚クヘキ行爲ト云フヘシ、况ンヤ彼
 ノ印度、緬甸等ヲ征服奪スルノ非慘猛烈ヲ極メタルニ於テチヤ、茲ニ於テ乎、英國
 ハ既往業ニ印度大帝國ヲ始メトシテ、緬甸錫蘭カシミヤ等ノ廣大ナル諸領地ヲ東洋
 ニ占有シ、前途猶ホ不撓不屈ノ經略ヲ以テ、勇チ我カ東洋ニ振ヒ、彼ノ魯國ト頡頏シ
 テ、大ニ爲ス所アラントス、豈ニ輕忽ニ看過スヘケンヤ
 次ニ彼ノ佛國ヲ見ヨ、其ノ東洋ニ振フ所ノ威勢ハ、彼ノ露、英二國ノ如ク孔々廣大ナ

ル能ハサルヘシト雖モ、彼ノ支那ニ對スル英、佛同盟軍ノ餘勢ヲ以テ、直チニ兵ヲ安
 南地方ニ送り、延テ一千八百六十二年ニ至ルマテ、下交趾ノ諸部ヲ征略シ、着々其ノ版
 圖ヲ擴メ、遂ニ第二段ノ下ニ於テ論述セシ所ノ如キ結果ヲ示セリ、然ル後チ諒山案件
 ヨリ、遂ニ清佛戰爭ヲ惹起シ、其ノ連戰ノ久シキ、結局稍ヤ困弊ヲ感シタルモノアリト
 雖モ、僅カニ此ノ一事ヲ以テ未タ佛國カ東洋ニ於ケル勢力ヲ滅殺セルモノト云フヘ
 カラス、何トナレハ、彼レカ亞細亞ニ於ケル佛領又タハ保護國トシテ、東京、安南、交
 趾支那、東滿塞等ヲ保タルコトハ、猶ホ依然トシテ前日ニ異ナラス、何ニモセヨ、佛國
 ノ如キハ、東洋ニ對スル經略上ノ勢力ニ於テ、先ツ露、英二國ニ次ク者ト云フヘシ
 此ノ中ニ處シテ、彼ノ波斯ノ一王國、北ハ露國ノ猛威ニ慄キ、南ハ英國ノ侵入ヲ恐レ、
 彼ノ阿富汗ト共ニ露、英相ヒ争フノ中心ト爲リテ、兩國ノ間ニ介在シ、狐疑猶豫、喘々
 焉トシテ微カニ其ノ氣息ヲ保ツアリ、又々彼ノ紅海及ヒ蘇士運河ヲ以テ、歐阿二洲ト
 壕隍ヲ畫シ、以テ亞細亞西門ノ關鑰タルヘキ亞刺比亞半島ノ如キモ、其ノ大概ハ蒙昧
 野蠻、敢テ論スルニ足ラス、而シテ其ノ紅海ノ咽喉ヲ扼セル亞丁及ヒペリトム、其ノ

他ノ群島ノ如キハ、概チ英國ノ所領ニ歸セリ、况ンヤ一葦帶水ヲ隔テ、其ノ前岸ニハ、悲風慘愴タル埃及ノ亡國アルニ於テチヤ

茲ニ於テ乎歐洲諸強國ニ對スル東洋亞細亞ノ面目ハ、僅カニ日、清二國ニ依テ保持セラル、モノニシテ、其ノ他ハ一モ談ルヘキモノナシ、日、清二國ノ東洋ニ處スルノ地位、豈ニ重カラストセンヤ、請フ二國ノ形勢ニ就テ、些カ論辯スル所アラシ

顧フニ支那ハ其ノ建國最モ古ク、其ノ版圖モ頗フル廣シ、支那ハ實ニ年老ニシテ、其ノ軀幹モ亦タ巨大ナルモノト云フヘシ、其ノ年老ノ極、稍ヤ老衰ヲ免レサルモノアリ、隨テ其ノ氣象モ老大ニ失スルヲ免レズト雖モ、其ノ往時ノ隆壯ナルニ於テハ、他ノ諸國ニ等匹ヲ見ルコト少レニシテ、其ノ老大ナル所、却テ自尊自重ノ氣象ヲ保持セル所アリ、茲ヲ以テ目下ノ形勢、他ノ後進ナル歐洲文明ノ隆運ニ後レタルノ憾アリ、爲メニ幾多ノ凌辱ヲ蒙リタルコトナシトセス、然レトモ其ノ自尊自大ノ氣象ヲシテ、一旦歐風ニ蘇生セシムルニ至リテハ、此ノ亞細亞ノ一大巨人國、未タ決シテ侮ルヘカラサルモノアリ、且ツ著者ヲ以テ之レヲ見レハ、其ノ容易ニ改良進歩スル能ハスシ

テ、舊株ヲ墨守スルノ陋弊アルカ如キモノハ、是レ却テ將來悠久ニ確乎不拔ナル改進ヲ爲スノ正當ナル秩序ナラント思フ、近來我カ日本人ハ、動モスレハ自ラ急進ノ開明ニ誇リテ、支那ヲ頑陋視スルノ風アリ、是レ思ハサルノ甚シキモノト云フヘシ、試ミニ見ヨ、其ノ軀幹矮少ナル者ハ多ク機智ニ富ミ、起居進退モ自由ナリ易ク、其ノ軀幹長大ナル者ハ、多ク緩悠ニ流レテ起居進退モ自由ナリ難シトハ、情態上世人ノ毎ニ認知スル所ナラスヤ、然レトモ、共ニ一旦發憤シテ競争又タハ力抗スル時ニ於テハ、矮少人ト長大漢ト、孰レカ勝チ孰レカ敗ルト云フコトハ、豫メ期スヘキノミ、若シ此ノ觀念ヨリシテ、彼ノ八十五萬三千四百方里ノ面積ト、三億六千三百四十萬口ノ人民トヲ有セル支那カ將來ニ爲ス所如何ナテ想ハ、日本人カ彼レニ對スルノ方策モ、當サニ講スヘキ所ヲ知ラン、於戲、支那ノ如キハ廣大ノ疆土ト、夥多ノ人口ト、無限ノ富力トヲ有シテ、將來ノ東洋ニ雄飛セントスルモノト云フヘシ、然レトモ唯タ一ノ顧慮スヘキハ、彼ノ俚諺ニ謂ユル「巨大ナル人ハ智慮總身ニ及フ能ハス」トノ一事是レナリ、左氏既ニ逝キ、李氏將サニ老ヒントス支那ハ果シテ能ク巨大ノ一身ヲ擧ケテ、露、

英、佛等ノ諸邦ヲ睥睨シ得ヘキヤ否ヤ

然ラハ我カ日本カ東洋ニ處スルノ地位、實力、果シテ如何シ、日本人ノ大和魂ヲ誇稱スルハ、彼ノ支那人ノ中華ヲ誇稱スルニ於ケルカ如ク、頗フル自尊自重ノ風ヲ示セリ、而シテ此ノ亞細亞絶東ノ海中ニ點在セル島嶼國ヲ以テ、古來未ダ曾テ一回マモ外侮ヲ蒙リタルコトアラス、而カモ彼ノ神功皇后ノ三韓征伐ヲ始トシテ、彼ノ武勇絶倫ナル元兵ノ來寇ヲ防撃シ、寸地モ彼レヲシテ我カ國土ヲ侵サ、ラシメサルカ如キ、又タ彼ノ秀吉ノ朝鮮征伐ニ於ケル、其ノ中途ニ死セルヲ以テ未ダ戰功ヲ全フスル能ハサリシト雖モ、其ノ驍勇猛烈ノ戰ヲ以テ、恣マニ朝鮮八道ヲ蹂躪シ、其ノ餘勢大ニ明ノ大國ヲシテ、我カ國ニ畏レシメタルノ實アルカ如キ、又タ近クハ彼ノ臺灣征伐ニ際シテ、支那ト談判シタルカ如キ、未ダ曾テ一回モ國辱ヲ外邦ニ示シタルコトナシ、而シテ其ノ制度文物百般ノ上ニ於テハ、彼ノ三韓及ヒ隋唐交通以來、皆十長ヲ彼レニ取リ、其ノ商業上ノ事ニ於ケルモ、彼ノ徳川初世ノ頃ニ當リテ、嘗ニ支那、朝鮮ト交通セシノミナラス、大ニ安南、東京、東浦塞、暹羅、呂宋等ノ諸國ト通商シテ、我カ國ノ威福

ヲ増發セントスルコトニカメタルノ痕アルヲ見ル、是レ歐米交通ノ路開ケタル今日ヨリ顧ミレハ、其ノ局面狹隘、其ノ運行微弱ナルヘシト雖モ、當時ニ在テハ實ニ日本ノ國威ノ海外ニ震ヒタルコトヲ證スヘキナリ、爾リ然ルニ萬國交際ノ今日ニ至リテハ、強邦ノ上更ラニ強邦アリ、富國ノ外尙ホ富國アルヲ見ル、然ルニ歐洲諸大國カ目下ノ富強猶ホ嫌ラスシテ、弱肉強食、優勝劣敗、唯々見ル一面ノ棋局ノ如ク、黑白相ヒ爭テ世界ノ全面ニ其ノ領地ヲ擴メント欲ス、若シ歐亞兩洲ヲ以テ黑白ノ基石ニ比セハ、其ノ歐洲ナル白石ハ、五洲ノ全面ニ領地ヲ求メ、一目一手、若々黒石ノ周圍ニ逼リテ其ノ底止スル所ヲ知ラス、然ルニ亞洲ナル黒石、更ラニ語ヲ切ニシテ之レヲ云ハ、日、清兩國ナル黒石ハ、更ラニ何レノ方面ニ向テ其ノ領地ヲ拓カントスル乎、彼ノ安南ヤ、東京ヤ、緬甸ヤ、印度ヤ、錫蘭ヤ、香港ヤ、東浦塞ヤ、交趾ヤ、既住ニ於ケル黒石ノ領地ハ、業ニ白石ノ領地ニ化セリ、剩ス所幾許ソ、朝鮮ヤ、暹羅ヤ、波斯ヤ、亞刺亞比亞、黒石ノ領地ト云ハ、則チ黒石ノ領地ナリ、然レトモ其ノ要害ハ毎ニ頗ル脆弱ニシテ、兩者ノ中間ニ彷徨セリ、夫レ唯々彷徨スト雖モ、久ク彷徨シ行クヘキヤ否ナ、天下

ノ形勢日ニ月ニ切逼スル所アラントス、我カ東洋ノ棋局ニ着目スル者、此ノ際如何ニ處セントスル乎

第二章 汕斷大敵

嗟呼、金堤千里ナルモ蟻壤ヨリ破レ、曠邈ナル原野モ螢火ヲ以テ熾ク、既ニ前段ノ觀察ヨリ推セハ、日本悠久ノ計圖ニ於テ、彼ノ露國カ圖南一搏ノ志ハ、決シテ之レヲ雲煙過眼ニシ去ルヘキニアラス、若シ德川隆運ノ昔時ニ在テ、德川政府ノ滅亡ヲ説カハ、誰レカ其ノ杞憂ニ驚カサラン、然レトモ、彼ノ緬王提保ハ英軍ノ將サニ其ノ境ニ迫ラントスルニ當リ、夢ニ臂ヲ焚カレタルヲ見テ、必定英軍ニ勝ツヘシト妄信シ、徧ク臣下ニ令シテ盛宴ヲ張ラシメ、且ツ王及ヒ其ノ妃ソピアナハ「我カ國ニ佛法アレハ、敵ニ當ルノ諸將ハ必ス英軍ヲ敗リ、盡ク之レヲ追逐シ、前キニ侵奪セラレタル地モ殘ラス回復シテ、再ヒヤンコロソニ王城ヲ建立スヘシ」ト思惟シ、毎日地圖ヲ披キテヤンコロソノ何レノ地カ最モ形勝ニシテ、宮殿ヲ建テ、車駕ヲ駐ムルニ足ルヘキヤヲ籌慮シ、未タ其ノ籌慮ノ熟セサルニ、既ニ亡國ノ嘆ヲ發セシト云フニアラスヤ、凡

ソ興亡存廢ノ跡ニ於テ、其ノ最モ恐ルヘキハ、井蛙ノ小見、徒ラニ自大自尊ノ妄念ノ増長スル時ニアリ、今ノ時ニ當リテ東洋ノ大勢如何ノニ注視セス、妖雲濛々天ノ西北ニ塞ルヲ見テ、徒ラニ網繆ノ志ナキ者ハ、名ケテ緬王焚臂ノ夢ヲ學フ者ト云ハサルヘカラス、蟻壤螢火、尙ホ夫レ恐ルヘシ、况ンヤ東洋形勢ノ定ムル所、斯クノ如ク切迫スルモノアルニ於テヤ

第三章 國家篡奪ノ謀略。法教者ノ陋劣

凡ソ國家侵奪ノ手段タル、先ツ文物交換、互市通商ノ事アリテ、宗教之レニ隨フ歟、先ツ宗教宣布ノ事アリテ、文物通商之レニ隨フ歟、何レヲ先コシ、何レヲ後チニスルニモセヨ、先ツ之レカ地步ヲ爲スモノナクンハアラス、其ノ最初ヨリ何等ノ關係ナキ處ニ向テ、無名ノ帥ヲ起スモノハ蓋シ少レナリ、顧フニ彼等ノ爲メニ其ノ手段ニ依リテ其ノ目的ヲ達セシムル所以ノモノハ、人心ノ腐敗頹亂、君臣ノ驕奢無道、彼レヲシテ容易ニ其ノ罅隙ヲ突カシムルニ過キス、而シテ其ノ腐敗頹亂ヤ、其ノ驕奢無道ヤ、素ト政綱弛ミ、風紀張ラサルニ依ルト雖モ、蓋ハ抑モ末葉ノ現象ニシテ、其ノ根本ト

スル所ハ、大ニ一國ノ人心ヲ糺合スヘキ宗教心ノ腐敗滅亡ニ起因セスンハアラス、然ル所以ハ、彼ノ希臘ノ滅亡ニ於テ、彼ノ羅馬ノ滅亡ニ於テ、彼ノ印度ノ滅亡ニ於テ、彼ノ緬甸ノ滅亡ニ於テ、彼ノ埃及ノ滅亡ニ於テ、自餘諸國ノ革命顛亂ノ形跡ニ於テ、歴々其ノ證左ヲ見ル、今マ我カ文明ノ旭光、將サニ地平線ヲ離レントスルノ日本ヲ以テ、不祥ニモ彼ノ亡國ノ起因ニ照スコトヲ好マスト雖モ、我カ國維新以來、人心德義ノ腐敗セル、日一日ヨリ甚シキヲ覺フ、此ノ際ニ當リテ、内ニハ我カ法敎家ノ運動七華八裂シテ、其ノ中心點ヲ失フニ至リ、其ノ七華八裂セサル者ハ、有氣ノ死人ト爲リテ、何等ノ活動ヲモ爲スコトナク、外ニハ己レノ無宗教ヲ露白シテ、厚顏人ニ誇ルノ破廉耻漢ヲ増殖シ、偶マ宗教心アルカ如キハ、輕躁浮薄、射利釣名、知ラス識ラス國ヲ賣ルノ不忠漢タルニ過キス、其ノ甚シキニ至リテハ、己レ我カ法敎者ノ一分ナルニモ拘ラス、彼レカ宗教ノ内情ヲ探知スルヲ名トシテ、竊カニゴツト崇拜ノ庠序ニ入學シ、其ノ座席ヲ共ニシ、其ノ音聲ヲ聞クニスヲ忍ヒサル異端外道ノ指揮ヲ受ケ、恬然愧ルナキノ愚蒙漢アリ、彼レ果シテ句踐、凌ヲ服スルノ忍耐アル乎、彼レ果シテ常盤、肌ヲ汚

スノ節烈アル乎、若シ之レアリトスルモ、口實ハ猶ホ容ルスヘシ、心實ハ未ダ之レテ容サ、ルナリ、何トナレハ、一ハ己ムヲ得サルニ出テ、他ハ自ラ好ソテ至ル、我カ正々堂々タル法敎家ノ興敎手段ハ、未ダ彼レカ如キ間者の拙劣手段ヲ假ルコトヲ要セサルナリ、既ニ信敎ハ自由ナリ、既ニ良心ハ正直ナリ、彼レ若シ真正ナル法敎者ナラハ、何ヲ苦ソテカ其ノ授業時間ニ於テ、己レノ信セサルコツト禮拜ノ席ニ列シ、良心ヲ掩フテ信仰アル顔色ヲ術フヤ、而シテ彼レ等ノ或ル者ハ云ヘリ「耶蘇ノ敎理淺薄信スルニ足ラスト雖モ、其ノ敎師管理者等ノ親切ニシテ規矩嚴正ナルハ、遠ク我カ佛者ノ及フ所ニアラス、實ニ感スルニ餘リアリ」ト、紫ノ朱ヲ奪フヲ惡ム、彼レ等ハ淺慮短識、其ノ外觀的親切ノ如何ナル罔ナルヤヲ知ラス、認メテ以テ陽春和氣、天真爛漫ノ花枝ニ啼クノ黃鳥ト思ヘリ、一分既ニ其ノ感化ヲ受ケテ其ノ良心ニ禁スル能ハス、盲進無謀、大蛇ヲ退治セントシテ大蛇ニ呑マル、嗚呼、慙ムヘシ、彼レモ早晚他ノ籠中ノ物ト爲リ去ルコトヲ、更ラニ其ノ甚シキニ至リテハ、誑詐狡猾、我カ敎田ヲ荒蕪シテ、今マハ衣食住ノ路絶ユルニ遇ヒ、苦悶憂鬱、遂ニ外教ノ東郭墻間ニ其ノ殘羹雜飯ヲ乞ハン

トスル者ナキニアラス、今マ斯クノ如キノ瑣事ヲ以テ、直ニ我カ法教衰運ノ兆候トスル者ニアラスト雖モ、内、既ニ斯クノ如クナレハ、外、我カ信徒ニ於テ、宗教心ノ冷淡離散、又々怪シムニ足ラサルナリ

第四章 法教ト外教トノ趨勢ノ比較

今マヤ我カ首府ニ於テ、駿河臺上、復活聖堂ノ鐘聲ハ、東台山中、寛永寺畔ノ鐘聲ヲ壓シテ、夜々我カ國民ノ夢魂ヲ驚カシ、三縁山裏、松樹蒼鬱タルノ邊、我カ法教ノ梵音ヲ聽カスシテ、蹶テ貧書生的外教者カ、聖書ヲ賣ルノ聲ヲ聽ク、帝國議會ノ傍聽席、手ニ珠數ヲ抓クルノ人ヲ見サルモ、胸ニ十字架ノ徽章ヲ輝カセルノ婦人アルヲ見ル、一ノ我カ法教の普通學校朝々ニ興リテ、夕ニ廢サレ、枯草蟲聲、亦々昔日ノ痕ナシト雖モ、外教の普通學校ハ到ル處ニ勃興隆起シテ其ノ勢焰ヲ揚クルヲ見ル、壯宏タル寺觀數百千人ヲ容ルヘキ地アルモ、一年僅カニ一回ノ教筵ヲスラ開クコト少ナルアルモ、彼ノ外教徒ハ巷閭ノ中、九尺二間ノ矮屋ヲ求メテスラ、其ノ何曜日ヲ期シテ、必ス説教講義ノ筵ヲ開ク、我カ法教家ハ五十人百人ノ聽衆、猶ホ其ノ少數ヲ不滿ニ思フコトア

リト雖モ、彼ノ外教徒ハ、二人三人ノ聽衆、猶ホ千萬人ニ對スルカ如ク、諄々トシテ能ク敷演ス、我カ法教ノ寺觀、或ハ殿堂荒蕪ニ屬シ、軒傾キ、瓦崩レテ、又々支持スヘカラサルモノアリト雖モ、彼ノ外教ノ會堂ハ、煉石疊々、燈光輝々、實ニ驚クヘキモノアルヲ見ル

斯クノ如キノ現象、未々以テ恐ル、ニ足ラス、然レトモ、我レハ千有餘年來ノ郷土ニ於テシ、彼レハ昨今、萬里ノ波濤ヲ超ヘ來リテ此ノ異郷ニ於テス、我レハ多クノ同類ト、多クノ躬方ト有シ、彼レハ少シノ同類ト、少シノ躬方ト有ス、其ノ總テノ權衡上ヨリ觀察シ來レハ、我カ法教家カ必ス反省自覺セサルヘカラサルモノアルヲ確信ス、著者ハ茲ニ絶望的ノ觀念ヲ以テ、彼レノ長ヲ擧ケ、我カ短ヲ説クモノニアラス、切ニ企望的ノ觀念ヲ以テ、勇奮猛進、彼レカ頭ヲ擡クルニ處ナカラシメンコトヲ望ムモノナリ、見ヨ彼ノ東洋ノ圖中ニハ、山川的ノ東洋ハ千古依然トシテ隆替ナケレトモ、其ノ國家的ノ東洋ハ、既ニ東洋ノ圖中ヨリ除去セラレタルモノ多キコトヲ、今マ我カ日本ヲ觀ルニ、有形的ノ日本ハ未々決シテ我カ東洋ノ圖中ヨリ除去セラレタルモノ

ナシト雖モ、既ニ無形のノ日本ハ、彼ノ西洋ノ圖中ニ編入セラレタルモノナシトセ
ス、無形のノ日本トハ何ソヤ、精神的ノ日本是レナリ、精神的ノ日本トハ何ソヤ、宗教
的ノ日本是レナリ、我カ法教家タル者、豈ニ戒慎セサルヘケンヤ

第五章 法教ノ郷土

人心ノ腐敗、宗教心ノ離散、既ニ我カ精神的日本ノ幾分ヲ腐蝕シ去レリ無形の國家先
ツ沮喪シテ、有形の國家ノ滅亡ヲ促スコト、既ニ前ニ陳ヘタルカ如シ、我カ法教家タ
ル者、大ニ活眼ヲ開キテ遠觀セヨ、深ク丹田ヲ凝ラシテ熟慮セヨ、東洋將來ノ形勢、若
シ我カ日本ノ安危ニ關スルカ如キコトアラハ、我カ法教モ自ラ日本ニ安全ナルコト
能ハス、然ラハ世界各國ノ中、何レノ處ニカ我カ法教ノ郷土ヲ求メン、其ノ本國ナル
印度、既ニ真正ナル我カ法教ノ郷土ニアラス、自餘ノ南方小乘的佛教國、何ソ真正ナ
ル郷土トスルニ足ランヤ、然ラハ其ノ郷土ヲ清國ニ求メン乎、彼レノ國俗民情、青黃
二衣ノ教風、未タ我カ法教ノ郷土タルヲ肯ンスルノ機運ニ達セス、然ラハ之レヲ彼ノ
西洋諸邦ニ求メテ、新郷土ヲ拓カン乎、是レ事理兩ナカラ非ナルノ感アリ、茲ニ於テ

乎、我カ大乘極致ノ法教ハ、目下ノ形勢、我カ日本ヲ離レテ外ニ郷土アルヘキニアラ
ス況ンヤ千有餘年ノ尙シキ、我カ皇室ト國民トニ對シテ、斷ツヘカラサル深緣アリ、
既ニ印度以東ニ於ケル諸國ノ法教、幾クカ隆替ヲ閱シテ、其ノ國家ト厄運ヲ共ニシタ
ルカ故ニ、今マヤ微々トシテ見ルヘキモノナシ、我カ日本ノ法教ハ、頼ヒニシテ國家
ト共ニ其ノ隆運ヲ維持シ來レリ、既往ノ經歷既ニ斯クノ如クナリ、將來ノ形勢ニ於テ
モ、我カ日本ノ安危ハ直ニ我カ法教安危ノ係ル所ヲラサルヘカラス、而シテ我カ法教
ノ安危ヨソ、直ニ我カ日本ノ安危ニ影響スル所ナカルヘカラス、茲ニ於テ我カ法教家
ハ、日本ノ爲メ、法教ノ爲メ、自ラ如何ニ處セントスル乎

第二編 日本ノ安危ヲ論シテ法教ノ獨立ニ及フ

第一章 日本ノ安危如何ノ不祥ノ文字

著者既ニ我カ日本國民ノ一分トシテ、法教ノ郷土ニ住スル一人トシテ、苟クモ日本ノ
安危ヲ口ニスルカ如キハ、實ニ忍ヒサル所ナリ、而シテ其ノ安危ヲ筆ニスルハ既ニ不
祥ノ文字タルヲ知ル、況ンヤ我カ日本ハ、鎖國ノ關門一タヒ破レ、幕政ヲ革メテ王政ニ

復シ、藩閥門地ノ陋弊ヲ排シテ、人才登庸ノ路ヲ開キ、專制政治ノ域ヲ脱シテ、立憲政治ノ境ニ達シ、凡百ノ制度文物、概テ其ノ利ヲ彼レニ取リテ、以テ我カ國ノ隆運ヲ資ク、維新以來星霜僅カニ二十餘年、彼ノ歐米諸強國モ猶ホ及ハサル長足ノ進歩ヲ爲セリ、何レノ處ニカ其ノ安危ヲ顧慮スルノ餘地アランヤ、然レトモ是レ其ノ内ヲ見テ、未タ外ヲ見サルノ說ナリ、唯々其ノ皮相ヲ察シテ、未タ骨髓ヲ察セサルノ見ナリ、著者ハ近來我カ國勢ノ如何ニ就テ、大ニ感スル所ナキ能ハス、請フ國力、民心ノ二點ヨリ、我カ國將來ノ安危如何ヲ論セント欲ス

第一段 國力上ヨリ日本ノ安危ヲ論ス

第一節 各國ト日本トノ國力上ノ比較

若シ夫レ有形上ヨリ國家ノ安危如何ヲ論セント欲セハ、先ツ統計上ヨリ之レカ標準ヲ自國ト外國トニ於ケル國力上ノ比較ニ則ラサルヘカラス、而シテ其ノ各種ノ統計上ニ就テ說ヲ立ツルハ、容易ノ事ニアラサルカ故ニ、今マ略シテ最モ其ノ要トスル所ヲ擇ヒ、唯々面積、人口、歲入、陸軍々人、軍艦、及ヒ人口ノ疎密ニ於ケル、我カ國ト

海外二十四箇國トノ比較ヲ舉クレハ左ノ如シ

國名	面積	人口	歲入	陸軍々人	軍艦	一方里内ノ人口
日本	二四七九六	三九六〇七三三四	八四五五三〇〇〇	二二〇一四二	三三	一五九七
支那	七五〇四三六	四〇二七三四九七七	九九三三三〇〇	一四六九二五〇	九二	五三七
朝鮮	一四一四七	一〇五一八九三七	一九〇八〇〇〇	七〇〇〇		七四四
暹羅	一〇六八六三	七〇〇〇〇〇〇	八七五〇〇〇〇	一一七五〇	八	六六
暹羅	五八三三三	六〇〇〇〇〇〇	一一六〇〇〇〇	一一九〇〇		一〇三
露西亞	一四四〇九五二	一〇八八四三一九二	六七三七一〇〇〇	六五九九九〇	三八六	七六
獨逸	三三〇五一	四六八五五七〇四	七二八〇六三〇〇	四九一六七七	二二	一三三七
佛蘭西	三三六五五七	六八三三五〇一一	七七八九九二〇〇〇	五二二四七二	三八八	二八九
英吉利	一五三〇九四六	三二四〇五九五七	八四九四六一〇〇〇	八一〇三三	二九〇	二〇五
伊太利	一九二二二	三〇二六〇六五	三七八一三七〇〇〇	三三三〇〇	一七五	一五七五
澳大利	四四三〇七	三九三八八八〇三	五〇〇四四一〇〇〇	九〇五六一八	一一〇	八八九
匈牙利	二七二九六九	三二六四七七五七	八四四〇六〇〇〇	一八二〇〇〇	六五	一一六
西班牙	一〇五九三七	二五五九一九二〇	一四七三三九〇〇〇	一三一四〇〇	一一四	二四〇
白耳義	一三七四八二	三二九七四七四三	六四九〇九〇〇〇	四三三〇三		二四〇

瑞典	五〇三三	六五四一八〇一	三五三七九〇〇	五七〇三〇	一二四	一三〇
挪威	一三〇五二	三四四三七三〇五	一〇五五五六〇〇	六五七三三	一四七	二六四
荷蘭	一三〇二二	九二九四五五一	四四七四五〇〇	三〇六〇七	五五	七五
葡萄牙	二六八二	二八四六一〇二	一一二七九〇〇	二〇三二七九	四七	一〇六二
希臘	四一九四	一九七九五六一	一八七一〇〇〇	二六三四五	四七	四七三
希臘	一五〇九九	二〇九六四六七	一九三一四〇〇	五九五六二	三九	一三九
丁抹	五九七二八八	五〇四四五三三六	三七七〇〇〇〇	二七一七四	八三	八四
合衆國	一三六一九〇	一〇四四七九七四	三七九〇〇〇〇	四〇〇	八三	八三
墨西哥	一〇九九	八〇五七八	一三〇九〇〇〇	四〇〇	七三	七三
布哇						

(右海外各國形勢一覽ニ依ル。表中。歳入ノ頃。△ハ金貨ニ依リ。□ハ銀貨ニ依ル。面積及ヒ人口ハ本國及ヒ屬國。殖民地等ヲ併算ス。陸軍軍人ハ整兵。艦隊。平時現員等ノ差アリ。軍艦ハ甲錢艦滿船ヲ併算シ又タハ艦隊附水雷艇ヲ併算セシモアリ)

右ノ表ニ依リ、更ラニ一覽ニ便利ナル爲メ、其ノ廣狹、多寡、疎密ノ順序ヲ比較スルハ左ノ如シ

面積	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五
英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹	英露支合土佛白和墨葡波西暹

人口	支英露佛合獨日	英佛獨露	佛獨露	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛	支英露佛
歳入	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露	英佛獨露
軍艦	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和	佛露英獨伊和
一方里内ノ人口	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞	日伊獨瑞

第二節 弱肉強食

法律ト云ヒ、規則ト云ヒ、縱ヒ何程ノ勢力アルモノトスルモ、一ノ邦國、一ノ團體中ニ於ケル相互相守ノ約束タルニ過キス、己レノ邦國ニ於ケル法律、他ノ邦國ニ對シテ何等ノ勢力カ之レアラシ、己レノ團體ニ於ケル規則、他ノ團體ニ對シテ何等ノ價直カ之レアラシ、彼ノ國際法ノ如キ、素ヨリ德義ノ制裁ニ依テ價直ヲ存スルモノナルモ、是レノ平和ノ時ニ於テ然ルノミ、若シ一朝事アリ、何レノ一方カ德義ノ範圍ヲ超出シ、何レノ一方カ其ノ機ニ乘セントスルノ場合アルニ於テハ、萬國公法ハ唯タ一堆ノ古紙

タルニ過キス、將々何等ノ勢力カ之アラン、此ノ時ニ當リテハ、彼此ノ間際涓塵ノ德義ナシ、毫髮ノ道理ナシ、唯々軍備ノ整否、武力ノ強弱如何ノニ依テ優勝劣敗ヲ決セシ、而シテ軍備ノ整否、武力ノ強弱ハ、何ニ依テ分ツヘキカヲ討ヌレハ、大ニ其ノ國ニ於ケル生産力ノ消長優劣如何ノニ關係シ、其ノ消長優劣ハ大ニ邦土ノ廣狹、人口ノ多寡、財政ノ豐險如何ノ等ニ原由スヘキハ勿論ナリトス、既ニ斯クノ如キノ原由ヲ明カコシテ、而シテ前節掲クル所ノ我カ日本ト各國トノ國力如何ノヲ比較セハ、果シテ何等ノ感想ヲカ生セン、況ンヤ我カ日本カ相ヒ對峙シテ、以テ國光ノ顯彰ヲ競ハント欲スルモノハ、彼ノ世界各國ノ中ニ於ケル、諸ノ小弱國ニアラスシテ、諸ノ強大國ニアルコトヲ了知スルニ於テテヤ、奇勝奇策、素ヨリ平生ノ恃ミニアラス、空論誇言、却テ其ノ國ヲ憊ルコト多シ、茲ニ於テ我カ國ハ、何ヲ以テカ此ノ優勝劣敗、弱肉強食ノ世界ニ處シ、以テ我カ國ノ泰平無事ヲ保持セントスル乎

第二段 民心上ヨリ日本ノ安危ヲ論ス

此ノ優勝劣敗、弱肉強食ノ世ニ處シ、我カ日本カ歐米諸強國ト對峙シテ、一朝事アルノ日ニ於テモ、能ク勝算ノ決スヘキモノアリヤト云フニ、既ニ前段論スル所ノ如ク、有形上ノ比較ヲ以テハ、實ニ覺束ナキモノアリトス、然ラハ民心上ニ於ケル國力ノ強弱ハ如何ノ、是レ日本國民ノ最モ今日ニ講究スヘキ要點ナリトス

第一節 道德心ノ腐敗

輓近我カ國ニ於ケル道德心ノ腐敗ハ、實ニ大息長嘆スヘキモノアリ、我カ國上下一般ニ於ケル、道義德操ノ觀念ハ、其ノ大勢上ヨリ幾ント地ヲ拂フタリト云フモ不可ナシ、些少ノ黃白ノ爲メニ己レノ良心ヲ典賣スル者アリ、朝夕ノ糊口ノ爲メニ其ノ言論ヲ二三ニスル者アリ、糟糠ノ妻ヲ堂ヨリ下シテ、漫ニ馬骨ヲ擁スル者アリ、口ニ廢娼ヲ論シテ自ラ娼門ニ出入スル者アリ、舊時己レノ赤貧又タハ危難ヲ救助セラレタル恩人アルモ、一旦風雲ニ際會シテ、金衣玉食ノ身ト爲リテハ、忽チ其ノ舊恩ヲ忘レ、剩ヘ恩人ノ零落困弊ニ遇フモ、更ラニ之レヲ救助セサルノミナラス、其ノ人ノ己レカ門ニ出入スルモ、尙ホ外見惡ク想ヘル者アリ、己レノ高位貴顯ノ身ヲ以テ、官用ノ爲メニ地方ニ出張シ、到ル處ノ賤業婦女子ニ戯レテ、醜聞ヲ世ニ流ス者アリ、己レカ私情私

欲ノ爲メニ、賣國ノ汚名ヲ買フ者アリ、無知ノ少女ヲ海外ニ誘拐シテ、國辱ヲ暴露スル者アリ、表ニ正義公道ノ招牌ヲ懸ケテ、裏ニ秘密探偵ノ疑ヲ受クル者アリ、陽ニ紳商ノ名ヲ博シテ、陰ニ有司ト奇利ヲ共ニスルノ譏ヲ免カレサル者アリ、憐ムヘキ娼門ノ租税ヲ廢センコトヲ議シテ、自ラ娼門ヨリ賄賂ヲ收メタルノ嫌ヒヲ招ク者アリ、國會議員ト爲ラントシテ賄賂ヲ贈ル者アレハ、又々之レヲ受クル者アリ、他ノ賄賂事件ヲ告訴シテ勝タンカ爲メニ、賄賂ヲ贈ル者アリ、己レカ不義ノ富貴ノ爲メニ其ノ子女ヲ別戸セシメテ、他ノ子女ヲ養フ者アリ、己レカ家督相續ノ爲メニ、養子カ養母ニ通スルノ非難ヲ受クル者アリ、自ラ貴顯縉紳ヲ以テ任シテ、密カニ財物ノ輸贏ヲ闘ハス者アリ、其ノ他種々無量ノ非事非行、擧ケテ算フヘカラサルナリ、而シテ是レ等ノ事、概テ中人以上ト稱スル者ノ中ニ於テ見聞スル所ナリ、彼ノ貧苦ニ逼ルカ故ニ竊盜ヲ働キ、彼ノ困窮ノ餘リニ出テ、密賣娼ヲ爲スカ如キ、亦タ何ソ論スルヲ須ヒン、是レ主トシテ上下一般ニ於ケル道德心ノ腐敗シテ、社會ノ風紀ヲ紊リタルニ起因セスンハアラヌ

第二節 宗教心ノ冷淡迷蒙

著者ハ斷言ス「其ノ國民カ宗教心ノ冷淡迷蒙ハ、將サニ其ノ片脚ヲ擧ケテ亡國ノ境ニ跨ラントスルモノナリ」ト、是レ著者カ臆斷詭言ニアラス、古來ノ亡國カ共ニ證スル所ナリ、著者ハ此ノ文明ノ曙光輝々タル我カ日本ノ國運ヲ以テ、決シテ亡國ノ兆ヲ含ムモノナリトハ信スル能ハス、寧ロ將來愈々文明富強ノ域ニ進歩スルモノナラント思ヘリ、然レトモ、是レ唯々物質的文明ノ上ニ就テ觀察セルモノニシテ、未タ精神的文明ノ上ニ於テハ、容易ニ將來ノ文明富強ヲ期スルコト能ハサルナリ、凡ソ真正ナル國家ノ文明富強ヲ期セント欲セハ、物質、精神、併セテ完全ノ進歩ヲ望マスンハアラヌ

試ミニ彼ノ羅馬ノ滅亡ヲ見ヨ、彼レ物質的文明正サニ其ノ極點ニ達シタルニモ拘ラヌ、精神的ノ文明日ニ陵夷シテ、徒ラニ虛麗浮華ニノミ流レタルカ故ニアラスヤ、又タ彼ノ徳川政府ノ滅亡ヲ見ルモ、幾ント之レニ類スルモノアリ、凡ソ精神的文明ニシテ發育進歩スル所アラハ、小邦ト雖モ未タ容易ニ亡ヒサルナリ、而シテ其ノ精神的文

明ノ發育ナルモノハ、一ニ宗教心ノ涵養ニ頼ラサルヘカラス
 嗚呼、我カ國最近宗教心ノ冷淡ニ流レタルコトハ、實ニ言語ニ斷ヘザルモノアリ、彼
 ノ社會ノ上流ニ位シテ、一般人士ノ模範ト爲ルヘキ貴顯縉紳ノ間ニ於テ、宗教心ノ冷
 淡ニ流レタルコトハ論ナク、其ノ布教傳道ヲ専門トスル我カ法教育家自身ニ於テモ、實
 ニ宗教心ハ冷淡ニ流レタリ、彼ノ貴顯縉紳者流ハ乃チ云フ、宗教ハ素ト虛妄ノ事タ
 リ、只々彼ノ智力ノ薄弱ナル徒カ、處世ノ心行ニ於テ、希望、恐懼、喜慰ノ念起ル毎ニ、
 之レニ依テ僅カニ安心立命スルノ方便説タルニ過キス、何ソ一定ノ識見アリ、富力ノ
 一家ヲ理スルニ豊カナル者ノ信仰崇奉スヘキモノナランヤ、其ノ少數ナル奇人アリ
 テ、偶々之レヲ信仰崇奉スルカ如キハ、是レ唯々己レノ嗜好心ヲ満足スルニ過キス、然
 ル所以ハ、彼レ等カ嗜好スル(信奉スルト云ハス)所ノ宗門ナルモノハ、敢テ現當二世
 ノ冥福ヲ祈リ、成佛得脱ヲ願フカ如キコトヲ爲サス、其ノ寺塔ヲ建立シ、僧侶ヲ供養
 スルカ如キハ、至竟物數寄タルニ過キス、又々概テ直截奇拔ナル機鋒ヲ闘ハスコトニ
 快濶ナル禪學ノ如キモノヲ嗜ムニ過キス、斯クノ如キノ信教ハ、強テ信教ト云ハ、云

ヘ、素ト是レ抹茶ヲ嗜ミ、骨董ヲ愛スルカ如キ閑事業ト何ソ撰ハント、其ノ宗教心ニ
 冷淡ニシテ、之レヲ度外ニ措ク者、固ヨリ愆レルハ論ナシト雖モ、亦々偶々之レヲ信奉
 スル者、若クハ近時彼ノ禪學ヲ修ムルナト云ヘル者ノ、斯クノ如ク冷評セラル、所以
 モ亦々無理ナラサル次第ニシテ、法教ノ何タルヲ辨知セス、禪ノ何タルヲ究盡セサル
 ノ罪ナラスンハアラス、又々我カ僧侶ノ一方ニ於テモ、因襲ノ久シキ、其ノ多數ハ唯
 タ念佛、修懺、看經、坐禪、年忌、葬祭ナト云ヘル表面的儀式上ノ法教ノミ勤修シテ、其
 ノ他ハ園藝、栽培若クハ自餘ノ卑猥ナル嗜好ヲ逞クスルニ過キス、而シテ其ノ真正圓
 滿ナル法教ノ理義ノ如キハ、管ニ之レヲ實地ニ敷演セサルノミナラス、又々自ラ法教
 ノ何タルヲ知ラサルモノ多シ、而シテ僧侶相互ノ中ニ於テ、談偶々茲ニ及フモノアレ
 ハ、彼レハ物識リ顔ヲ爲ス者ナリ、彼レハ平生面倒ナル談話ヲ爲スモノナリトシテ、
 到ル處ニ彈斥セラル、而シテ其ノ謂ユル僧侶間ノ交際ナル者ハ、儀式上又々ハ嗜好上
 ノ交際乎、若シ否ナ、レハ月掛無盡講ノ會友タルニ過キサルナリ、嗚呼、彼レ等ノ胸
 中豈ニ因果ノ信スヘキモノアランヤ、彼レ等ノ日用、豈ニ後生ノ大事アランヤ、其ノ

内外一般ニ於ケル宗教心ノ冷淡モ、此ニ至テ谷レリト云フヘシ
 宗教心ノ冷淡ナルハ、唯ダ因果ヲ撥無シ、後生ヲ等閑ニ付スルノ罪ノミニ限ラス、其
 ノ社會ノ風紀ヲ紊リ、其ノ人心ノ固結ヲ破ルコトニ於テ、大害ナシトセス、然ルニ宗
 教上ノ迷妄モ、亦タ宗教ノ理義ヲ誤リ、併セテ社會文明ノ發達ヲ傷害スルコト多シト
 ス、著者密カニ現今我カ法教ノ大勢ヲ想察スルニ、彼ソ天台、臨濟等ノ宗門ニ在テハ、
 宗教心ニ冷淡ナル者多ク、彼ノ眞、日蓮等ノ宗門ニ在テハ、宗教上ノ迷信妄信殊ニ其
 ノ多キヲ覺フ、而シテ又タ何レノ宗門ニ拘ラス、或ル信徒ニ於テハ、其ノ法理教義ノ
 如何ヲ問フノ眼ナク、只タ其ノ法師タル者ノ人物如何ニ依テ、己レカ法教信仰ノ
 標準ヲ定メ、亦タ他事ヲ顧ミサル者アリ、是レ或ハ不可ナシト雖モ、又タ一種ノ迷信
 妄信ニ屬セスンハアラス、而シテ其ノ弊害ノ及フ所ハ、其ノ迷妄ナル信用ノ薰染ニ依
 リテ、一ノ不満足ナル法師ヲ信用スルノ餘リ、他ニ如何ナル高德博識ノ良師アルモ、
 之レニ歸崇ノ念ヲ起サス、其ノ甚シキニ至リテハ、却テ之レヲ輕賤視スルニ至ルモノ
 アリ、斯クノ如キ妄信者流ハ、恰モ世間ニ於ケル遊蕩兒カ、己レノ愛スル力士俳優ノ

類ヲ最負ニスルト何ソ擇ハン、著者ハ其ノ高德博識ノ良師ヲ尊敬シテ、法義ヲ叩クノ
 信徒アルヲ喜フト共ニ是レ等ノ妄信者流アルヲ悲ム者ナリ、切ニ注意セサルヘカラ
 ス、而シテ法教各宗一般ニ於ケル迷信妄信ノ徒ノ如キハ、大ニ世運ノ開明ヲ防障スル
 コト少ナカラス、豈ニ省ル所ナクシテ可ナランヤ

第三節 尙ホ恃ムヘキモノアリ

法教ノ時弊ハ今マヤ既ニ其ノ極ニ達シ、道德心ハ腐敗シ、宗教心ハ冷淡迷妄ノ境ニ至
 ル、嗚呼、何ヲ以テカ我カ法教ヲ維持シ、何ヲ以テカ我カ國家ヲ嚴護セン、茲ニ至テ我
 カ法教家ハ、拱手無然、一モ爲ス所ナクシテ止マン乎、否ナ決シテ然ラサルナリ、著者
 ハ確カニ之レヲ認ム、我カ法教如何ニ今日ノ悲境ニ呻吟スルモ、尙ホ恃ムヘキモノア
 ルコトヲ

何ヲカ尙ホ恃ムヘキモノトスル乎、我カ法教殊ニ我カ日本ノ法教カ、其ノ性質ニ於テ
 他ノ支那及ヒ西南諸國ノ法教ヨリ、完全ノ組織ヲ得タルコト是レナリ、我カ日本ノ法
 教カ、他ノ諸外教ニ比シテ、更ラニ圓滿ノ成立ヲ得タルコト是レナリ、我カ日本ノ法

教カ、我カ日本ノ國風民俗ニ浸染シテ、互ニ磨滅離散スヘラカサル習慣ヲ養ヒタルコト是レナリ、我カ日本ノ法教カ、我カ國體ヲ維持スルコトニ恰好ナル性質ト、經歷トヲ併有シタルコト是レナリ、我カ日本ノ法教カ、國民ノ大概ヲ擧ケテ其ノ信徒ト爲シ居ルコト是レナリ、我カ日本ノ法教カ、全國ニ瀰漫セル寺院ト檀越トヲ有シテ、布教傳道ニ容易ナル便宜ヲ有スルコト是レナリ、我カ國民特有ノ愛國心ハ、其ノ布教ノ方法次第ニテ、最モ我カ法教ノ教義ニ符合シ易キコト是レナリ、我カ日本ノ法教ハ、神道及ヒ外教ニ比シテ、更ラニ多クノ布教者ヲ有スルコト是レナリ、是レ等ノ諸點ハ、我カ法教カ如何ニ時弊ノ極ニ達シタルモ、如何ニ道德心、宗教心ノ腐敗迷妄ノ境ニ至リタルモ、尙ホ恃ムヘキモノアルヲ確認セシムルノ價直アルナリ、然レトモ之レヲ此ノ儘ニ放過シテ、更ラニ顧ル所ナキカ如キハ、決シテ恃ミトスルニ足ラサルナリ、茲ニ於テ乎、愈々日本法教家ノ將サニ盡スヘキ任務アルコトヲ知ラサルヘカラス

第二章 日本法教家ノ任務

第一段 日本ノ法教トハ何ソヤ

日本法教家ノ任務ヲ論スルニ當リ、先ツ「日本法教」トハ何事ナルカヲ略述スルノ機會ヲ得タリ、著者ハ前來、我カ國ノ法教(世ニ謂ユル佛教)ヲ指シテ、直ニ佛教トモ、佛道トモ、佛法トモ、且ツ宗教トモ、教法トモ云ハス、唯タ「日本法教」ト云フナリ、而シテ法教ニ日本ノ二字ヲ冠シタルハ、些カ擇フ所アルナリ、夫レ唯タ「日本法教」ト云ヒテ、世ニ謂ユル佛教等ト云ハサルモ、敢テ他ノ神道、及ヒ我カ國ニ於ケル儒道、外教等ニ混スル憂ヒナシ、又タ茲ニ「日本法教」ト名クルモノハ、或ハ奇ヲ好ムノ譏ヲ受クルコトモアレトモ、決シテ奇ヲ好ムニモアラス、唯タ我カ日本ノ法教カ、其ノ性質、來歴ノ上ニ就テ、斯ク名ケサルヘカラサルノ必要アルヲ認ムルカ故ナリ、請フ節ヲ逐フテ之レヲ論セン

第一節 神道

或ル人ハ云フ「佛教ハ外來ノ法教ナリ、故ニ之レヲ日本法教ト云フヘカラス、若シ日本法教ト名クヘキモノアリトセハ、神道コソ日本法教ト名クヘケレ」ト、是レ未タ我カ法教ノ意義ヲ解セサルノミナラス、又タ大ニ神道ノ本旨ヲ了セサルモノナリ、顧フ

ニ神道ノ名ノ我カ國ニ稱ヘラル、モノ、敢テ新シキニアラスト雖モ、其ノ謂ユル神道ナルモノハ、我カ國カ萬國ニ冠絶セル國體上ニ於ケル報本ノ大義ニ基キ、國祖皇宗ヲ祭祀スルノ道ヲ云フニ過キサリナリ、故ニ神道ハ祭祀ニシテ、宗教ニアラス、祭、教ノ二者ハ素ヨリ分離スヘキモノニシテ、混一スヘキモノニアラサルハ、世間既ニ定論アリ、尤モ祭祀ニモ二種ノ差別アリテ、其ノ報本追孝ノ紀念ニ屬スヘキモノト、欣求祈願ニ屬スヘキモノトアリ、而シテ前者ハ專ラ祭祀ニ屬シ、後者ハ專ラ宗教ニ屬ス、其ノ神道ノ祭祀ナルモノハ、謂ユル報本紀念ニ屬シテ、欣求祈願ニ屬スルモノニアラサルハ明ラケシ、例セハ我カ法教中ニ於テモ、寺院ニ於テハ佛殿ト祖堂開山堂トノ別アリ、在家ニ於テモ佛壇ト位牌堂トノ別アルカ如シ、其ノ佛菩薩ニ對シテハ、後生ヲ欣求シ、菩提ヲ祈願スルコトアリト雖モ、其ノ開祖々先等ニ對シテハ、追孝修福ノ念ヲ以テ之レヲ供養スト雖モ、之レカ冥助ヲ祈ルコトナシ、茲ヲ以テ若シ正常ニ解釋シ去ラハ、神道ハ祭祀ニシテ宗教ニアラサルコトヲ熟了セン

既ニ斯クノ如クナルカ故ニ、皇祖ヲ奉祀シ、功臣ヲ鎮祭スルノ道タル、凡ソ日本帝國

ノ臣民タル者ハ、信教ノ自由ヲ享有シテ、縱ヒ何等ノ宗教ヲ信奉スルニモセヨ、其ノ神道上ノ祭祀ニ至リテハ、普ク奉持セサルヘカラサルノ義務アルモノトス、而カモ此ノ義務アリテ之レヲ竭クスト雖モ、信教ノ自由ヲ害スルモノニアラス、是レ祭祀ト宗教トノ別異アルカ爲メナリ、若シ此ノ差別ヲ混シテ神道ヲ一種ノ宗教ト看做スカ如キハ、是レ大ナル謬見ニシテ、信教ノ自由ハ是レヨリ毀傷セラル、ニ至ラン、何トナレハ我レハ佛教者ナルカ故ニ、皇廟若クハ賢所ニ參拜セスト云フ者起リ、我レハ耶穌教徒ナルカ故ニ、日本ノ神ニ何等ノ關係ナシ、啻ニ何等ノ關係ナキノミナラス、寧ロ我カ教敵ナリトノ觀念ヲ抱キテ、不忠ノ民ヲ生スルコトアレハナリ、現ニ或ル外教徒ノ如キハ、宗教上ノ妄念ヨリ、勅語捧讀式ニ不敬ノ舉動ヲ爲シ、兵士ヲシテ招魂社ニ拜禮セシムルカ如キハ、信教ノ自由ヲ傷害スルモノナリト云ヘルニアラスヤ

然ルニ彼ノ執拗ナル神道者流ニ於テハ、是レ等ノ差別アルヲ顧ミス、神道ヲ一種ノ宗教ナリト固執シテ、神聖ナル憲法ノ意義ニ衝突シ、自ラ神道ノ神道タル威靈ヲ瀆サント欲ス、彼ノ國體ノ事ニ諳悉セルヲ以テ稱スル所ノ神道者ニシテ、其ノ國體ヲ毀傷ス

ルコトヲ念トセサルハ何ソヤ、顧フニ彼ノ神道者ノ中ニ於テモ、近來大ニ自省スル所アリ、神道ヲ以テ一種ノ宗教ト看做スノ妄想ニ至リテハ、未ダ消滅スル能ハスト雖モ、大ニ宗教上ノ觀念ノ我カ國體上ニ影響スルコトヲ曉リ、祭教區別ノアル所ヲ明カニシ、神官ト神道教導職トヲ分離スヘシト云フノ論議囂々タルカ如キハ、全ク勢力アル祭教判然ノ一現象トシテ見ルヲ得ヘシ、而シテ彼レ不分離論者ノ云フ所ノ如キモ、全ク理由ナキニアラストスルモ、蓋ハ我カ法教渡來以降ニ於ケル、本地垂跡等ニ於ケル方便説、及ヒ人心調和ノ政策タル三教一致ノ言旨ヲ襲套セルモノニシテ、神道末流ノ餘弊タルニ過キス、此ノ餘弊ヲ襲套シテ、焉ンソ神道ノ神道タル本旨ヲ失却シ、延テ皇國ノ國體ニ影響ヲ及ホスコトヲ省ミサランヤ

此ノ故ニ彼ノ神道ナルモノハ、祭祀ニシテ宗教ニアラサルコト明ラケシ、若シ強テ教ノ名ヲ施シ得ヘクンハ、國家ノ治教トモ云フヘク、倫理ノ世教トモ云フヘキノミ、何ソ日本ノ宗教ト名クヘクンヤ、其ノ組織上ニ於テ、適マ日本宗教ノ假面ヲ裝ヒ居ル者ハ、或ル必要的ヨリ、法律上之レヲ一種ノ宗教ト見做シテ、教導職アルコトヲ許スノ

ミ

第二節 儒道

神道ハ法教ニアラサルコト、既ニ前節ニ述フルカ如シ、然ラハ彼ノ儒道ハ如何ソ、若シ三教一致、三法鼎足ナト云ヘルノ所談ヨリ考察スレハ、儒道モ尙ホ一種ノ宗教トシテ見ルコトヲ得ヘキカ如シ、然レトモ、儒道ナルモノハ、其ノ性質上ニ於テモ、其ノ組織上ニ於テモ、其ノ法律上ニ於テモ、其ニ宗教トシテ見ルヘカラサルモノナリ、先ツ其ノ性質上ヨリ論ゼンニ、凡ソ宗教ナルモノハ、必ス顯幽二界ニ貫通シテ、形而上不可知の處ニ於テ、安心立命ノ地盤ヲ定ムヘキモノナリ、然ルニ彼ノ儒道ノ如キハ、其ノ主要トスル所、専ラ形而下ニ於ケル顯界ノ一方ニ傾キ、其ノ正心誠意ノ學ヨリ、修身齊家ノ事ニ及ホシ、延テ治國平天下ノ道ヲ教ユルカ如キハ、全ク道德倫理ノ學術ヨリ、國家ノ政道ヲ講スルモノニシテ、大ニ宗教ト其ノ趣ヲ異ニセリ、而シテ其ノ顯界ノ事ヲ主トシテ、幽界ノ事ヲ顧ミサルニ至リテハ、全ク宗教トシテ名クヘキモノナシ、今マ其ノ的證ヲ舉クレハ、儒聖孔子カ樊遲ノ知ヲ問フニ對シテ「務ニ民之義ニ敬ニ鬼

神而遠之可謂知矣」ト云ヘルカ如キ、又「子不語怪力亂神」ト云ヘルカ如キ、又「季路カ鬼神ニ事ヘンコトヲ問フニ對シテ「未能事人焉能事鬼」ト云ヒ、敢テ死ヲ問フニ對シテ「未知生焉知死」ト云ヘルカ如キハ、皆ナ顯界ノ事ヲ主トシ、幽界ノ事ハ其ノ及フヘカラス知ルヘカラサルモノト觀念シタルノ結果ナラスンハアラズ、而シテ彼ノ「生事之以禮死葬之以禮祭之以禮」ト云ヘルカ如キ、又「夫三年之喪天下之通喪也」ト云ヘルカ如キハ、是レ彼ノ神道ノ祭祀ニ於ケルカ如ク、報本追孝ノ禮ニ過キス、焉ソ其ノ報土ヲ莊嚴シ、福善ヲ回向スルト云フカ如キ趣意アラソヤ、且ツ夫子路カ禱ランコトヲ請フニ臨ンテ「丘之禱久矣」ト云ヘルカ如キ、又「獲罪於天無所禱也」ト云ヘルカ如キ、又「内省不疚夫何憂何懼」ト云ヘルカ如キニ至リテハ、其ノ平生ニ於ケル道德仁義ノ外、他ニ欣求禁厭ノ必要ナキヲ證スルニ足レリ、何ソ其ノ性質上ニ於テ宗教ノ觀アラン、而シテ組織上ニ於テモ、唯タ一種ノ倫理學、一種ノ道德學、一種ノ政治學、一種ノ哲學トシテ應用研究スヘシト雖モ、未ダ之レヲ基礎トシテ、寺院ヲ建立シ、教職ヲ設置シ、以テ布教傳道スヘキモノニアラス、

既ニ然ラハ儒道ハ性質上、組織上、法律上、共ニ宗教トシテ名クヘカラサルハ勿論ナリトス、彼ノ三教一致、三法鼎足ノ所談ノ如キハ、素ヨリ曖昧世界ニ於ル調和主義ノ方便說ノミ

第三節 外教

一ニ外教ト云フモ、之レヲ區別スレハ耶蘇正教(希臘教)アリ、耶蘇舊教(羅馬加特力教)アリ、耶蘇新教(布勒特斯丹德教)アリ「ユニテリアン」教アリ、而シテ其ノ一種ノ宗教中、教會教派ノ數種ニ分裂シ居ルモノアリ、然レトモ、總テ其ノ性質上及ヒ組織上ニ於テハ、宗教トシテ見ルヘキアルハ勿論ナリト雖モ、未ダ日本ノ法律上ニ於テハ、彼ノ諸種ノ外教ヲハ、日本ノ宗教トシテ公認セサルコト、著者カ前卷公認教制定ノ可否ヲ論スルノ下ニ於テ論辨セシ所ノ如シ、且ツ著者カ前卷信教ノ自由及ヒ制限ヲ論シタルノ旨趣ニ由ラハ、其ノ性質上ニ於テモ、彼ノ外教ハ日本ノ宗教トシテ危害ナキヤ否ヤト云フニ至リテハ、先ツ問題中ニ置キテ、宜シク試験ニ供スヘキモノナリトス、何ソ勿卒ニ之レヲ日本ノ法教ト名クルコトヲ得ン、况ヤ彼ノ外教ハ、其ノ本國

ノ保護庇蔭ヲ待ツニアラサレハ、未タ我カ國ニ獨立スルノ勢力ナキニ於テチヤ

第四節 日本法教

前數節ニ於テ、既ニ論述スル所ノ如ク、彼ノ神道ハ法律上之レチ一種ノ宗教ト見做シテ、政府カ特例ヲ與フルコトアルモ、其ノ性質、組織、共ニ宗教トシテ見ルヘカラサルモノアリ、若シ強テ宗教ト名ケ得ヘキモ、極メテ不完全ナル宗教タルヲ免レス、又タ彼ノ儒道ノ如キハ、性質、組織、法律ノ三者、共ニ宗教トシテ見ルヘカラサルハ勿論ナリ、而シテ彼ノ各種ノ外教ニ至リテハ、其ノ性質ハ宗教トシテ見ルコトヲ得ヘキモ、之レチ日本ノ宗教トシテ見ルコトヲ得ヘキヤ否ヤト云フコトハ、前節既ニ論述シタル所ノ如シ、且ツ其ノ組織ニ於テモ、未タ決シテ充分ナル發達アルモノト爲スヘカラス、况ンヤ法律上ニ於テハ、未タ日本ニ外教アルヲ公許セサルニ於テチヤ茲ニ於テ乎、日本法教トシテ、性質、組織、法律ノ三者ヨリ、共ニ完全ナル名實ヲ得タルモノハ、唯リ我カ法教アルノミ

著者ハ何故ニ我カ法教ヲ法教ト云ヒテ、佛教ト云ハサルヤ、些カ其ノ所思ヲ陳述セン

一神、儒二道、及ヒ外教、既ニ我カ日本ノ宗教タル性質、資格ヲ具備セサルモノタル以上ハ、我カ法教ヲ以テ日本法教ト名クルハ至當ノコトナリ

二我カ法教ハ佛アリテ後チ法アルニアラス、佛ハ法ニ依リテ成佛得道セルモノナレハ、直ニ其ノ根本基礎ナル法ニ依テ、法教ノ名ヲ得ルハ至當ノコトナリ

三法ハ本ニシテ、教ハ末ナリ、法ハ萬代不易ニシテ、教ハ時機國土ニ隨テ變スヘキモノナリ、此ノ本末變常ノ理ヲ具足セル法教ノ二字ヲ以テ名クルハ、名實共ニ至當ノコトナリ

以上舉示セル所ノ如ク、日本法教ノ名ハ、其ノ實ニ照シテ最も適當ナルコトヲ認メタレハ、特ニ此ノ名ヲ用ヒタルナリ

第二段 法教家ノ本分

我カ日本ノ法教家ハ、我カ日本カ國力上、孔々關心スヘキモノアリ、民心上下又タ悲惨スヘキモノアルニモ拘ラス、前章既ニ陳述セルカ如キ、尙ホ多クノ恃ムヘキモノチ有セリ、而シテ著者カ因テ以テ恃ムヘキモノト爲セルモ、若シ我カ法教家ノ心行如何ンニ依リテハ實ニ恃ムヘカラサルモノト爲ルナリ、其ノ死活消長ハ、一ニ法教家ノ本分ヲ盡スト盡サ、ルトニ係レリ、豈ニ顧ミサルヘケンヤ

法敎家ノ本分トハ乃チ何ソ、真正ナル法敎ノ旨趣ヲ敷演シテ、大ニ敎化ヲ普及スヘキコト是レナリ、大ニ敎化ヲ普及セハ、其ノ權越信徒ノ信根ヲシテ、堅牢不拔ノモノヲラシムヘキナリ、其ノ信根ヲシテ堅牢不拔ヲシメハ、大ニ民心ヲ一致固結セシムヘキナリ、民心ニシテ若シ一致固結セハ、啻ニ無形世界ニ於テ、其ノ勢力ヲ強大ナラシムルノミナラス、進テ有形世界ニマテ、其ノ勢力ヲ強大ニシ得ヘキナリ、若シ有形世界ノ勢力ニシテ、強大ナルコトヲ得ハ、國家ノ事又々焉ソ憂フルニ足ラン、而シテ有形世界ノ勢力ハ、其ノ本ヲ無形世界ニ養フヘキコトヲ知り、無形世界ノ勢力タル、我カ日本ニ於テハ、其ノ性質上ヨリスルモ、其ノ歴史上、又々ハ習慣上ヨリスルモ、我カ法敎ヲ以テ之レヲ養フニ最モ適當ナルモノトスレハ、我カ法敎家タルモノハ、單ニ法敎家トシテノ本分ニ於テモ、又々日本國民トシテノ本分ニ於テモ、共ニ法敎宣布、國家鎮護ノ忽諸ニ付スヘカラサルヲ知ラン

既ニ日本帝國ノ臣民トシテ、籍ヲ此ノ國ニ掛ク、官吏ハ政事ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、學者ハ學事ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、醫師ハ醫術ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、商人ハ軍事ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、農夫ハ農業ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、商估ハ商業ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、工匠ハ工藝ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、漁父ハ漁業ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、學生ハ勉學ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘク、子守ハ保育ニ於テ忠ヲ國家ニ竭スヘシ、彼ノ紙屑ヲ拾フテ以テ其ノ日ノ生業ヲ營ム者、彼ノ硝子ノ碎片ヲ買フテ其ノ口ニ糊スル者、彼ノ馬糞ヲ掃除シテ往來ヲ淨ムル者、彼ノ塵泥ニ塗レテ行人ノ鞋履ヲ繕フ者、「貴賤雖異」等、出門皆有「營」誰レカ本分ノ業務ヲ以テ誠忠ヲ國家ニ竭サ、ルモノアラン、我カ法敎家ノ如キハ、既ニ日本帝國ノ臣民トシテ、殊ニ社會ノ上流ニ位スル者ナリ、何ヲ以テカ誠忠ヲ國家ニ竭シ、何ヲ以テカ自餘ノ臣民ニ其ノ模範ヲ垂レントスル乎、若シ不了簡ニモ、寺祿檀施ノ豐饒ナルニ安ンシ、淨利、日暖カナル處、枕臺、風涼シキ邊ニ在テ、倒臥横眠、終日爲ス所ナキカ如キハ、啻ニ佛祖ノ罪人ナルノミナラス、我カ國家ハ決シテ斯カル臣民アルヲ許サ、ルナリ、宜シク法敎ヲ宣布スルハ、國家ヲ利益スルナリ、國家ヲ利益スルハ法敎家ノ本分ニ適フモノナリトノ意ヲ體得シテ、法敎、國家、併ヘ益セスンハアラス

第三段 法教家ノ覺悟

法教家ノ本分ハ、如何ニ斯クノ如キモノナリト云フトモ、若シ之レヲ實際上ニ竭クスコトナキカ如キハ、宛カモ賣藥ノ効能ヲ説クカ如シ、之レヲ服セサルニ於テ、將々何ノ靈驗カ之レアラソ、然ラハ我カ法教家ハ、宜ク其ノ本分ノ定ムル所ニ隨テ之レヲ竭クスノ覺悟ヲ定メサルヘカラス、然ルニ一步ヲ退キテ竊カニ思フニ、法教ノ時弊實ニ今日ニ達シタル以上ハ、我カ法教家カ其ノ覺悟ヲ爲スノ最モ難キコトヲ知ル、夫レ唯マ難シ然レトモ、之レヲ難シトテ遲疑逡巡シ去ルカ如キハ、覺悟ノ覺悟タル所以ニアラス、覺悟ヲ催カスハ縦ヒ人ニアリト雖モ、之レヲ決スルハ己レニアリ、我カ法教家ハ如何ニ其ノ覺悟ヲ決スル乎、之レヲ決スルノ路、唯マ一アリ、曰ク「己レハ何故ニ法教家タル乎」ト云フコトヲ認得スルコト乃チ是レナリ

第四段 法教獨立ノ方法如何ソ

既ニ法教家ノ本分ヲ了得シテ、之レヲ竭スノ覺悟ヲ定メタル以上ハ、必ス先ツ我カ法教ヲ獨立セシムルコトニ盡力セサルヘカラス、若シ我カ法教ノ獨立ニシテ、頼ムヘカ

ラサルモノアラハ、何ヲ以テカ法教ノ隆昌ヲ期圖スルヲ得ソ、然ラハ如何ニシテ法教獨立ノ方策ヲ講スルコトヲ得ヘキ乎、請フ下ニ論述スル所アラソ

第一節 法教ノ盛衰ニ關スル統計上ノ比較

一概ニ寺院ノ多寡ヲ以テ、法教ノ盛衰消長ヲトスヘカラス、然レトモ、數年若クハ數十年ニ涉ルノ日月ニ就テ、其ノ寺院ノ多寡増減如何ソテ比較セハ、又々大ニ法教ノ盛衰消長ヲ卜知シ得ルノ徵證ト爲スニ足ラン、是レ何レノ世、何レノ國ヲ問ハス、堂塔伽藍ヲ建立スルカ如キハ、法教興隆ノ一現象トシテ見ルヲ得ヘク、而シテ彼ノ廢寺合寺ノ擧アルカ如キハ、決シテ法教盛昌ノ兆候トシテ見ルヘカラサルモノナレハナリ、況ンヤ寺院ノ多寡増減ハ、直ニ僧侶及ヒ檀越信徒ノ多寡増減ト相ヒ伴フモノアルニ於テヤ、今マ明治五年ヨリ、同二十一年ニ至ルマテノ間ニ於テ、我カ法教各宗ノ寺院カ、如何ニ増減セシカヲ、左ノ四箇年ノ統計ニ依テ對照スルニ

寺

院

明治五年

明治十二年

明治十七年

明治廿一年

天台宗	六三九六	四八一〇	四七五一	四七七一
眞言宗	一三五八九	一三一一三三	一二九四九	一二九八七
淨土宗	一〇五〇六	八二四二	八三二四	八二七九
臨濟宗	八六六一	六二五六	六一五三	六一七四
曹洞宗	一四九四八	一四二五二	一四二六三	一四〇七二
黃檗宗	八五九	五四九	五六七	六〇二
眞宗	二二九四六	一九〇九〇	一九一六八	一九一四四
日蓮宗	三五三二	四九二六	五〇一四	五〇〇一
時宗	九〇〇	五三三	五二八	五一三
融通念佛宗	三〇四	三五五	三五六	三五七
獨立別宗	一〇			
本宗未詳	三			
法相宗			二四	四八
華嚴宗				二一
合計	八三六五四	七二一五五	七二〇九七	七一九七三

(右ノ表中明治五年分ハ教學新叢書ノ示ス所ニ依テ計算シ明治十二年以後ノ分ハ統計年鑑ノ示ス所ニ依

ル○明治五年ノ表中獨立別宗トハ法相宗華嚴宗律宗四宗兼學ニ宗兼學ヲ總稱セシモノヲ云フ○明治十二年ノ表中獨立別宗本宗未詳法相宗華嚴宗ノ寺數ヲ列記セサルハ是レヨリ先キ各他宗へ合併又々ハ所屬セシニ依ル○法相宗ハ明治十五年(六月)眞言宗ヨリ分離獨立シ華嚴宗ハ明治十九年(六月)分離獨立セシニ依リ分離獨立以後ニ係ル表中ニハ之レヲ別ツ)

若シ右ノ表中ニ就テ、一々仔細ニ點檢シ來レハ、或ル部分ノ宗門ニ於テハ、甚シキ寺院ノ減少ヲ見ス、又々ハ幾分カ増加セシモノナキニアラスト雖モ、其ノ總體ニ就テ概見スレハ、寺數次漸ニ減少シテ、僅々タル十七年間ニ、一萬千六百八十一箇寺ノ減少ヲ見ル

然ルニ眼睛ヲ一轉シテ、此ノ十七年間ニ於ケル寺院ノ減少ニ對シテ、我カ國ノ人口ハ如何ニ増殖セシカヲ對照スレハ

	寺	院	人
明治五年	八三六五四	三三一〇八二五	
明治十二年	七二一五五	三五二八三七〇六	
明治十七年	七二〇九七	三七四五一七六四	
明治廿一年	七一九七三	三九六〇七二三四	

既ニ斯クノ如ク我カ法教各宗ノ寺院カ、著シク減少セシニ、我カ國ノ人口ハ、次漸ニ増加シテ、僅々タル十七年間ニ於テ、既ニ六百四十九萬六千四百九人ノ増加ヲ見ル、人口ハ一年ヨリ増加シ、寺院ハ一年ヨリ減少ス、若シ斯クノ如キ逆比例ヲ以テ、將來五十年、百年ノ後チニ至ラハ、果シテ如何ナル結果ヲ生スヘキヤ、是レ我カ法教家タル者、深ク慮ラサルヘカラサル要點ナリトス

著者思フニ、彼ノ維新ノ際ニ於ケル廢寺合寺ノ擧ハ、端ナクモ夥多ノ寺院ヲ減少セシメタレハ、彼ノ表中最モ多數ナル明治五年ノ寺數ト雖モ、之レテ實際ニ維新以前ノ寺數ニ對照スルヲ得ハ、著シキ減少ヲ見ルヲ得、而シテ彼ノ明治十年ノ頃ヨリ、徐々ニ廢寺、合寺、復舊ノ擧アルヲ聞キ、又彼ノ北海道ノ如キハ、其ノ大體上ヨリ云ハ、縱ヒ少數ナリト雖モ、既ニ百三四十箇寺ノ新寺建立アリ、然レトモ、増加ハ尙ホ減少ニ敵スル能ハスシテ、遂ニ斯クノ如キノ結果ヲ見ル、而シテ斯クノ如ク人口ノ増加スルニ拘ラス、寺院ノ減少ト共ニ、僧侶モ次漸ニ減少ノ實アルヲ示シ、次第ニ左ノ如ク爲レリ。

	寺 院	住 職	無住又ハ兼住寺院
明治十二年	七二一五五	五六三九九	一五七五六
明治十七年	七二〇九七	五六三八九	一五七〇八
明治廿一年	七一九七三	五一三七七	二〇五九六

斯クノ如ク寺院ニ對スル住職ノ數不權衡ニシテ、無住又タハ兼住ノ寺院益々多キニ至ルコトハ、實ニ寺院ノ廢絶ニ赴クノ徵證タルニ止マラス、又タ大ニ僧侶ノ減少ヲ徵證スヘキモノアルヲ知ルヘシ

第二節 日本ノ地積人口ト寺院住職トノ權衡

我カ國ノ地積人口ト、寺院僧侶トノ權衡ヲ見ルコトハ、先ツ其ノ日本全國中ニ就テ、風土、人情、地形、中偏等ニ於ケル差異ノ大略ヲ區別シテ、其ノ面積ノ廣狹、人口ノ疎密等ヲ比較シ、之レニ對スル寺院ノ疎密、及ヒ住職ノ多寡等ヲ對照シ、以テ布教ノ難易、順序ノ緩急、責任ノ輕重等ヲ瞭知スルニアリ、而カモ之レニ先立チテ、一ノ參考ニ資スヘキモノハ、各其ノ方面ニ於ケル各宗寺院ノ疎密多寡如何ヲ對照スルニアリ、

乃千其ノ表ヲ舉クレハ左ノ如シ

	天台	眞言	淨土	臨濟	曹洞	黃檗	眞	日蓮	時	融通念佛	法相華嚴
本州中區	三〇一四	六一七一	三八二〇	三三〇〇	七四三一	二三八	八四五五	三二六二	三二〇		
本州北區	五八二	一六一一	六二一	二八六	三二六四	二六	一八九七	三三八	二二〇		
本州西區	八〇九	三八三五	三〇三三	一六九七	二二七九	二〇七	五七〇六	一一三九	七二	三五六	四五
四國	一五五	一〇六九	一三三	三〇三	二一九	一八	四八五	一〇三	三		
九州	二〇八	二九一	六三六	五八二	九三〇	一一二	二五四六	二四一	八		
琉球		八		六							
北海道	三	五	四八	一	四九	一	五五	二八			
合計	四七七一	一二九九五	八二七九	六一七四	一四〇七二	六〇二	一九一四四	五〇〇一	五二三	三五七	四五

(本州中區)東京、神奈川、埼玉、千葉、茨城、栃木、群馬、長野、山梨、静岡、愛知、三重、岐阜、滋賀、福井、石川、富山(本州北區)新潟、福島、宮城、山形、秋田、岩手、青森(本州西區)京都、大坂、奈良、和歌山、兵庫、岡山、廣島、山口、島根、鳥取(四國)徳島、香川、愛媛、高知(九州)長崎、佐賀、福岡、熊本、大分、宮崎、鹿児島(琉球)沖縄(北海道)

右ノ表中、眞言、曹洞、黃檗、時、融通念佛、法相、華嚴ノ七宗ハ、其ノ寺院ノ總數ヲ舉ケ

テ、一統治ノ下ニ屬スレトモ、他ノ天台、淨土、臨濟、眞、日蓮ノ五宗ハ、左ノ諸派ニ分立セリ

天台	淨土	臨濟	眞	日蓮
天台宗	淨土宗	臨濟宗	眞宗	日蓮宗
天台山宗	淨土宗西山派	臨濟宗天龍寺派	眞宗本願寺派	日蓮宗
天台宗眞盛派		臨濟宗相國寺派	眞宗大谷派	日蓮宗妙滿寺派
		臨濟宗建仁寺派	眞宗佛光寺派	日蓮宗本成寺派
		臨濟宗南禪寺派	眞宗專修寺派	日蓮宗興門派
		臨濟宗妙心寺派	眞宗木邊派	日蓮宗八品派
		臨濟宗建長寺派	眞宗眞正寺派	日蓮宗不受不施派
		臨濟宗東福寺派	眞宗出雲路派	日蓮宗不受不施講門派
		臨濟宗大徳寺派	眞宗山元派	
		臨濟宗圓覺寺派	眞宗誠照寺派	
		臨濟宗永源寺派	眞宗三門徒派	

故ニ例セハ、一ノ方面ニ於テ一宗一百箇寺アリトスルモ、甲派ハ既ニ其ノ中ノ五十箇寺ヲ有シ、乙派ハ三十箇寺ヲ有シ、丙派ハ十箇寺ヲ有シ、丁派ハ三箇寺ヲ有シ、殘レル七

箇寺ハ、戊、己、庚、辛ノ諸派ニ於テ分有シ、或ハ又ターノ方面ニ於テ、一箇寺ヲモ有セサルノ宗派モアルコトヲ察セサルヘカラス

次ニ右十二宗中、管長、教師、非教師、生徒ノ總數ヲ列擧スレハ左ノ如シ

天台	眞言	淨土	臨濟	曹洞	黃檗	眞蓮	日蓮	時蓮	融通念佛	法相
管長	三	二	九	一	一	一	六	一	一	一
教師	三二七一	七五二三	六九六一	六〇六八	一二二八二	三三五	一一一九七	五〇六四	三〇〇	二七七
非教師	八六五	二〇二	二三八三	七四五	八八二	九〇	二四三九五	一七九二	二五二	一一二
生徒	九一二	五〇〇九	一二七七	一三〇一	...	一九〇	四〇六六	六八七	一二七	六三
合計	五〇五一	一二七三五	一〇六二三	八一二三	二〇一〇四	六一六	三九六六八	七五四九	六八〇	四五三

華嚴	一	一二	一	六	二〇
總計	三七	五二二九三	三九六七三	一三六四二	一〇五六四五

次ニ全國各方面ニ於ケル、人口、面積、寺院、住職ノ數ヲ列擧スレハ左ノ如シ

人口	面積	寺院	住職
本州中區	一五三三一六五九	六一四五・九九	三五九〇二
本州北區	五九九二〇一七	五〇七一・八二	八六三五
本州西區	九〇九六四八六	三四七二・七二	一九一九一
四國	二八二八八二一	一一八〇・六七	二四八六
九州	五七三一〇〇七	二六七〇・八九	五五五四
琉球	三七二四三九	一五六・九一	一四
北海道	二五四八〇五	六〇九五・三六	一九〇
合計	三九六〇七二三四	二四七九四・三六	七一九七三

次ニ各方面ニ於ケル一方里内ノ人口ハ、如何ニ疎密ノ差アル乎、各方面ニ於テ一箇寺

ニ對スル面積ハ、幾許ノ割合ナル乎、各方面ニ於ケル寺院住職一人ニ就テ、人口ハ幾許ノ割合ナル乎ヲ對照スレハ左ノ如シ

	一方里ニ付人口	一箇寺ニ付面積	住職一人ニ付人口
本州中區	二四九四・四五 ^人	〇・一七一 ^{方里}	五九四・二七 ^人
本州北區	一九七一・〇一	〇・五八〇	九一四・三九
本州西區	二九〇七・六七	〇・一八〇	七一四・〇八
四國	二四八〇・六三	〇・四七四	一五四九・一八
九州	二二四五・七三	〇・四八〇	一三三〇・三一
琉球	二三七三・五一	一一・二〇七	二八六四九・一五
北海道	四一・六三	三三・〇八〇	一八四六・四一
平均	一五九七・四〇	〇・三四四	七七〇・九一

次ニ一箇寺ニ對スル戸數ハ、幾許ノ割合ナル乎、一戸ニハ幾許ノ人口ヲ有スル乎ヲ示サシカ爲メ、明治十五年ヨリ、同廿一年ニ至ルマテノ七年間ニ於ケル、全國戸數、人口、及ヒ一戸ニ對スル平均人口ノ統計ヲ掲クシ左ノ如シ

年	戸數	人口	平均戸人口
明治十五年	七六一・一七七〇 ^戸	三六七〇〇・一二八 ^人	四・八二 ^人
明治十六年	七六四九・〇四八	三七〇一七三〇・二	四・八四
明治十七年	七六七二・三三三	三七四五・一七六四	四・八八
明治十八年	七七一〇・二二一	三七八六・八九八七	四・九一
明治十九年	七七四七・一一五	三八五〇・七二七七	四・九七
明治二十年	七七七一・三九五	三九〇六・九六九一	五・〇三
明治廿一年	七八〇二・八二六	三九六〇・七二三四	五・〇八
七年間ノ増加	一九一〇・五六	二九〇七・一一六	二・二六

(表中明治十五年ヨリ十八年マテハ一月一日ノ調査ニ係リ十九年ヨリ廿一年マテハ十二月三十一日ノ調査ニ係ル)

既ニ斯クノ如ク人口ノ増加ハ、累年戸數ノ増加ヲ促カスニモ拘ラス、一戸ニ對スル人口モ次第ニ増加シテ、斯クノ如キノ結果ヲ見ルニ至リタリ、若シ此ノ趨勢ヲ以テ推サハ、我カ國ノ戸數、人口ハ、數十年ヲ出テスシテ、著シキ増加ヲ見ルヤ必セリ、而シテ我カ國ニ於ケル寺院及ヒ僧侶ノ數ハ、年ヲ逐フテ減少セリ、然レハ各寺ニ對スル檀家

信徒ハ、次第ニ増加スルノ傾向アル乎、是レ實ニ疑フヘシ、今マ明治廿一年ニ於ケル寺數ニ對スル戸數、及ヒ人口ノ割合ヲ示サハ左ノ如シ

寺院	戸數	人口	一箇寺ニ付 戸數	一箇寺ニ付 人口
七一九七三	七八〇二八二六	三九六〇七三三四	一〇八・四 _F	五五〇・三〇 _A

(以上各種ノ統計表ハ日本帝國統計年鑑ノ示ス所ヲ基礎トシテ之レヲ調査ス)

日本ノ地積、人口、戸數ト、寺院、住職トノ權衡ハ、大略斯クノ如シ、而シテ我カ國ニ於ケル人民中、純粹ナル外教徒モアラン、純粹ナル神道者モアラン、又タハ真正ナル信仰ノ上ニ於テハ、外教又タハ神道ニ何等ノ關係ナキモ、或ル必要、或ル因縁等ニ依リテ、其ノ信徒タルノ外見ヲ粧ヒ、其ノ教籍ニ列スル者モアラン、又タハ何種ノ宗教ニモ依ラス、純粹ナル無宗教者タル者モアラン、然レトモ、若シ總體上ヨリ觀察シ來レハ、彼レ等ハ實ニ僅々タル少數ニシテ、其ノ大概ハ皆ナ我カ法教中ニ於ケル、何宗何寺ノ檀家タラサル者鮮ナシ、而シテ彼ノ檀家制度ナルモノハ、一家ヲ舉ケテ其ノ教徒タルヘキモノナレハ、其ノ人口モ自ラ我カ教徒タルヘキ者ナリ、茲ニ於テ乎、我カ國

法教各宗ノ寺院住職ハ、其ノ面積、人口、戸數ニ對シテ、實際上幾許ノ檀家ト信徒トヲ教導シ居レル乎、著者ハ敢テ彼ノ年忌、葬祭、彼岸會、盂蘭盆會等ノ如キ、形式的寺檀ノ關係ヲ以テ、敢テ度外ニ置ク者ニアラサントモ、其ノ活動的寺檀ノ關係、即チ法教ノ法教タル道ヲ盡スコトニ至リテハ、其ノ寺院住職及ヒ檀家信徒ノ減少セルコト、實ニ前來掲クル所ノ權衡ヨリモ、更ラニ甚シキモノアルコトヲ認ムルナリ、嗚呼、之レヲ如何ンセン

茲ヲ以テ、前節及ヒ本節ニ於ケル統計上ノ比較ヨリ來レル第一着ノ必要ハ、日本法教ノ獨立ヲ圖ラント欲セハ、他ノ人ニ求ムルコトヲ後チニシ、己レ先ツ毅然トシテ獨立スヘキハ勿論ナリト雖モ、亦マ法教盛衰興亡ノ大勢ハ、一人一己ノ力、能ク企及シ得ヘキニアラサルコトヲ察知シ、總テ空算上ノ論議ヲ廢シ、實際上ノ勢力ニ依ルヘキコトヲ勉メサルヘカラス、而シテ其ノ第一着ノ方法ハ他ナシ、法教上ノ統計ヲ明確精細シ、年々相ヒ改メテ前後ニ鑑照シ、以テ其ノ衰ヘタルハ挽回シ、盛ナルハ益々進ムルコトヲ勵マスニ在リ

今マヤ我カ國ニ於ケル法教上ノ統計ハ、頗フル幼稚ノ點ニ在リ、而シテ其ノ甚シキニ至リテハ、法教家自ラ統計事業ノ何ナルコトヲ知ラサル者多シ、彼ノ内閣統計局ノ編纂ニ係ル日本帝國統計年鑑ノ如キモ、社會ノ進歩日ニ複雜繁劇ニ趣キ、年々明確精細ヲ加ヘ、詳略宜キニ適フモノアルニモ拘ラス、其ノ宗教上ノ統計ニ至リテハ、頗フル疎濶不完全ノ點ナキ能ハス、今マ一二ノ例ヲ擧クレハ、彼ノ寺院僧侶ノ數ノ如キモ、唯々宗門ノ別ノミアリテ、派門ノ別ナケレハ、臨濟、眞、日蓮等ノ諸宗ノ如キ、何派ニハ幾許ノ寺院、講社、住職、教師、非教師、生徒アリテ、其ノ國別、又々ハ府縣別ハ如何ナル乎、何派ハ幾許ノ寺院、講社、住職、教師、非教師、生徒アリテ其ノ國別、又々ハ府縣別ハ如何ナル乎ト云フカ如キハ、毫モ之レヲ辨別スルニ由ナシ、其ノ派門ノ別レタル宗門ニ在テハ、其ノ宗門總體ノ統計ヲ知ルコトヲ要スルト共ニ、切ニ派門各別ノ統計ヲ知ランコトヲ要ス、何トナレハ其ノ實力形勢、毫モ甲派ト乙派ト關係スル所ナクレハナリ、而シテ其ノ各宗各派ニ於ケル檀家信徒ノ數ノ如キハ、未タ毫モ之レヲ窺知スルニ便アラス、又々彼ノ住職以外ノ者ニ於テハ、未タ其ノ幾許カ前住職ナルヤ、其

ノ幾許カ未住職ナルヤヲ瞭知スルノ途アラサルナリ、是レ等ノ諸點、頗フル疎濶不完全ヲ免レスト雖モ、彼ノ普通世間ノ統計表タル、是レ等ノ事ニ敢テ詳密ノ必要ヲ感ゼスト思ヒ、或ハ其ノ材料未タ其ノ詳密ヲ悉クス能ハサル等ヨリ、生シタル結果ナルヘケレハ、我カ法教家タル者ハ、恬然拱手シテ之レヲ世人ニ委スヘキニアラス、宜ク自ラ發憤シテ、之レカ明確精細ヲ圖ルヘキナリ

然リ、而シテ我カ法教ノ統計上、最モ其必要ヲ感スルモノハ、宗別、派別、及ヒ寺院、講社、住職、前住職、未住職、徒弟、并ニ管長、教師、非教師、生徒ノ員數、及ヒ其ノ國別、又々ハ府縣別、住職又々ハ管長以下ノ年齡別、并ニ死亡ト得度ノ比較、檀家信徒ノ員數、及ヒ其ノ國別、又々ハ府縣別、寺籍財産ノ價格、本山及ヒ末寺ノ歲入、歲出額、宗務所、及ヒ教會講社ノ經費額等ヨリ、就學者、不就學者ノ員數、及ヒ宗費自費ノ區別、布教費、巡回費、說教、演說、開筵ノ度數、被教化者ノ員數、及ヒ慈善事業等ニ關スル金穀物件ノ價格員數等ヲ明確精細ニスルニ在リ、而シテ我カ法教家ノ大半カ、統計事業ノ必要ヲ感セサルノ今日、未タ急激咄嗟ニ完全ノ結果ヲ見ル能ハサルヘシト雖モ、次第ニ

進歩スルニ於テハ、自ラ完全ノ結果ヲ期スルコト難シトセス
 凡ソ盛衰興亡、多寡増減ノコト、之レヲ曖昧模糊ニシテ、其ノ算數ノ徴スヘキモノナ
 クシハ、自ラ遊惰怠慢ニ流レ易キハ、常人ノ免レサル所ナリトス、彼ノ小學ニ於ケル
 勤惰表カ、如何ニ生徒ヲ勵マセル乎、彼ノ長者鑑、相撲番附ノ類ノ如キモノカ、其ノ社
 會ノ者ニ對シテ、何等ノ觀念ヲ惹起セシムル乎ヲ觀察シテモ知ルヘシ、古來、我カ法
 教家ハ道念ノ存スル所、一箇半箇モ道猶ホ存シ、道念ノ存セサル所、千人萬人モ魔魅
 ノ群ニ異ナラスト云ヘルカ如キ高尚ナル觀念ヨリ、敢テ數理的ニ目前ノ盛衰興亡、多
 寡増減ヲ比較スルカ如キコトヲ忌メリ、從上ノ人ニ在テハ、是レ等ノ觀念、素ヨリ適
 當ナルヘシト雖モ、其ノ最モ少數ナル從上ノ高僧ニ應用スヘキ言ヲ以テ、直ニ多數ナ
 ル凡僧カ、遊惰怠慢ヲ恣ニスルノ口實ト爲スニ至リテハ、弊害モ亦タ甚シト云ハサル
 ヘカラス、茲ヲ以テ、斯クノ如ク一目瞭然、自他宗派ノ盛衰興亡ノ形勢ヲ示シ、多寡増
 減ノ別アル所ヲ對照セハ、優者ハ愈々進ミ、劣者ハ益々競ハントスルノ効益アルナリ、
 而シテ此ノ統計上ノ結果ニ對シテ、我カ法教家ニ最モ自省セシムヘキ要點ハ、其ノ住

職、前住職、未住職徒弟等ノ現數、及ヒ年齡別、及ヒ死亡數、得度數ノ比較ニ照シテ、將
 來充分ナル法教ノ相續者ヲ有シ居ル乎、其ノ檀家信徒ノ數ニ對シテ、自ラ如何ニ布教
 傳道シ居レル乎、其ノ宗門寺院ノ經濟ニ照シテ、自ラ幾許ノ經費ヲ要シ、以テ宗門及
 ヒ國家ニ對シテ之レニ對スルノ本分義務ヲ竭クシ居レル乎、我カ法教ノ寺院、僧侶、
 檀家、信徒ト、彼ノ外教ノ教會、牧師、信徒等トハ、將來如何ニ消長増減シ行クヘキ乎
 ト云フカ如キニアルモノトス、我カ法教上、統計ノ必要及ヒ効益夫レ斯クノ如シ、著
 者ハ法教ノ盛衰興亡ヲ以テ、單ニ數理的ニ割出スヘシト云フモノニアラスト雖モ、此
 ノ數理的ノ多寡増減ハ、法教今日ノ機運ニ於テ、直ニ道念ノ濃淡冷熱ヲ瞭知スルノ標
 準タルヲ認ムルモノナリ

第三節 法教上ニ於ケル支那ト日本

教主釋迦無尼世尊曰ク「今此三界、皆是我有、其中衆生、皆是吾子」ト、金口ノ所說夫レ
 斯クノ如シ、何レノ處カ佛國土ニアラサラン、那箇ノ衆生カ佛子ニアラサラン、其ノ
 我カ法教ヲ宣布スルニ於テハ、素ヨリ歐、亞、米、濠ノ別ナシ、然レトモ其ノ時機國土

ノ三者ニ就テハ、切ニ觀察ヲ要スヘキモノアリ、彼ノ華嚴會座ノ頓大乘ノ如キ、唯マ上根ノ菩薩ノミアリテ、能ク信解スト雖モ、自餘ノ衆生ハ聾ノ如ク、啞ノ如シ、彼ノ梁ヲ去テ江ヲ涉リ、嵩山ノ下、少林ノ中、面壁冷坐、九年ノ久シキヲ閱ス、皆ナ時機國土ノ擇フヘキモノアルカ爲メナリ、其ノ熟セル時機ヲ措テ、未タ熟セサル時機ニ對シ、其ノ應スヘキ國土ヲ捨テ、未タ應セサル國土ニ入ル、利害向背、固ヨリ比スヘキニアラス

維新以來、歐米物質的文明ノ我カ國ニ輸入セララル、ト共ニ、我カ國人、殊ニ中流以上ニ在ルノ輩ハ、百事歐米ノ文物ニ心醉スルコト啻ナラス、而シテ其ノ心醉ノ結果タル、概テ外尊内卑ノ弊ニ陥ルコトヲ免レンス、此ノ際ニ當リテ、我カ法教家中、或ル部分ノ人々ハ、彼ノ歐米物質的ノ文明ト共ニ、彼ノ各種ノ外教ノ我カ國ニ輸入セラレタルヲ見テ、我カ法教モ亦タ彼ノ歐米諸邦ニ向テ輸出シ、以テ彼ノ綠眼紅毛ノ徒ヲシテ、我カ佛化ニ浴セシメント欲ス、其ノ志ヤ實ニ嘉ミスヘシ

然レトモ、凡ソ一事業ヲ爲サント欲セハ、其ノ志ノ必要ナルヲ知ルト同時ニ、其ノ實カノ必要ナルコトヲモ知ラサルヘカラス、况ンヤ萬里ノ波濤ヲ超ヘ、其ノ異教ノ蔓延流布シテ、各人ノ腦中ニ浸染シ、百般ノ風土、人情、禮式、作法ヨリ、政治、法律ノ部分ニマテ、其ノ宗教ヲ以テ感化セラレタル異郷ニ到リテハ、如何ナル忍耐力、如何ナル金力等ヲ以テ、能ク其ノ效果ヲ奏シ得ヘキヤテ豫知セサルヘカラス、試ミニ彼ノ各種ノ外教カ、維新以來我カ國ニ宣教セシ所ノ形跡ニ就テ見ヨ、彼レ等カ我カ國ニ布教スルコトニ就テハ、我カ法教家カ外國ニ布教スルヨリモ、多クノ便宜ヲ有シ居レリ、將來ハ去來知ラス、既往ニ於テハ、彼レ等ハ年々歲々鉅萬ノ布教費ヲ其ノ本國ヨリ受領シテ、救貧獎學ノ事ニ投セリ(其ノ一)彼レ等ハ文質的文明ニ於テ、我カ國ノ師範國ナリト云フカ如キ感念ヲ以テ、我カ國ニ臨ミ、我カ國人、殊ニ社會ノ上流ニ位セル者ノ一半モ、此ノ感念ヲ以テ彼レヲ迎ヘ、彼此共ニ物質的文明ノ影響ハ、精神的文明ノ上ニ及ホシ、之レヲ拒ムコト能ハス、或ハ元來宗教心ニ冷淡ナル我カ國上流社會人士ノ一半ハ、其ノ交際上ノ便宜ヨリ、歐米人ノ歡心ヲ買ハンカ爲メ、又タハ表面ノ開化風ヲ粧ハンカ爲メ、良心ニ信セサル外教ヲハ、信仰セルノ顔色ヲ呈シ、且ツ少シクハ無

宗教者ノ體面ヲ糺ヒテ、一時ノ利便ヲ計ル者アリ、是レ等ノ如キハ、彼レ等ニ取テハ格別ノ利益ニアレサレトモ、其ノ影響ノ及ホス所ハ、間接ニ多クノ無智浮薄ナル男女ヲ驅テ、其ノ宗教内ニ牽入ル、ノ助力ト爲レリ(其ノ二)其ノ他彼レ等ハ、種々ノ便宜ヲ有シ居レトモ、斯クテスラ彼レ等ハ種因ニ對スル結果尠ナク、其ノ期スル所ヲ達シ難キニ惱メリ、我カ法教家ノ歐米ニ布教セント欲スル者、其ノ資力ヤ、其ノ忍耐力ヤ、其感應力ヤ、現今ノ形勢ニテハ、素ヨリ彼レニ及フヘクモアラス、唯タ幾分ノ便宜トモ思フヘキハ、我カ法教ノ彼ノ各種ノ外教ニ比シテ、多量ノ理性的分子ヲ含有シテ、普通人衆ノ耳朶ニ入り易キコト、或ハ彼レカ好奇心ヨリ、其ノ信スルニアラサルモ、之レヲ研究セント云フカ如キコト、是レナリ、斯クノ如キコト、豈ニ恃ミト爲スニ足ランヤ、要スルニ我カ法教家今日ノ實力ニテハ、未タ歐米各國ニ宣教スルノ時機到ラス、且ツ其ノ國土ノ如キモ、猶ホ彼レヨリモ急ニ擇フヘキモノアリ、蓋ハ又タ何ソヤ、鄰邦支那帝國是レナリ

支那ハ實ニ我カ亞細亞ノ一大巨人ナリ、實ニ亞細亞ニ於テ一大巨人ナルノミナラス、世界各國ニ於テモ比倫希レナル一大巨人タルニ相違ナシ、顧フニ秋毫ノ末ヲ察スレトモ、自ラ其ノ睫ヲ見ル能ハサル者、比々皆ナ然リ、世人ハ彼ノ政治ト云ヒ、法律ト云ヒ、鐵道ト云ヒ、電線ト云ヒ、一ニ耳目ヲ遠ク歐米各國ニ注キ、國家百年ノ大計ニ於テ、眼前此ノ一大巨人ニ注目スヘキコトヲ解セス、動モスレハ、自ラ物質的文明ノ先進ヲ以テ、彼レヲ侮慢シ、歐米諸強國ト比肩センコトヲ熱望シテ、支那ト親好スルコトヲ愧ツルカ如キ形狀アリ、而シテ藥罐ノ容易ニ熱シテハ容易ニ冷ヘ、鼎呂ノ容易ニ熱スル能ハサルモ、一回熱スレハ又タ容易ニ冷ヘサルノ所以ヲ知ラサル者アルハ、實ニ淺薄ノ見ト云フヘシ

顧フニ我カ國常流人士カ、支那ニ對スルノ觀念ハ、時々ニ變シテ定マル所ナカラントス、抑モ我カ日本カ支那ニ於ケルノ關係ハ、往昔、文物、制度、法教、技術ノ輸來ニ依テ、彼レヲ尊崇スルコト現今ノ泰西諸強國ニ於ケルヨリモ甚シカリシト雖モ、我カ國カ彼レノ文明ヲ利用スルノ力漸ク進ミ、敢テ彼レニ讓ラサルモノアルニ至リテハ、大ニ彼レヲ尊崇スルノ念ヲ薄シ、加フルニ彼レカ曲學俗風、以テ頑愚固陋ノ弊ニ流ル

、ニ至リテハ、却テ彼ヲ輕侮スルノ傾向ヲ生シ、且ツ彼ノ著明ナル鴉片戰爭及ヒ英佛同盟軍ノ起ルヤ、慘然タル敗衄、城下ノ盟ヲ爲スニ至リ、愈々彼レヲ蔑如スルノ感ヲ起シ、加フルニ維新ノ革變ニ遇フテ、我カ國カ泰西ノ文明國ヲ尊崇スルノ念慮ヨリ、支那ヲ輕蔑スルノ念ヲシテ、一層甚シキヲ覺ヘシメ、更ラニ進ンテ彼ノ征韓論、臺灣事件、及ヒ琉球處分ノ如キハ、大ニ日、清兩國ノ親好ヲ害シ、其ノ他米國ノ勞働社會ニ於ケル支那人排斥論ノ如キ、我カ國ニ於ケル彼ノ行商人ノ風儀宜シカラサルガ如キ、總テ我カ國人ヲシテ、彼レト相ヒ親交スルヲ厭ヒ、益々彼レヲ侮慢セシメタルモノナラスンハアラス、然ルニ、彼レモ亦久シク東洋ノ老衰國ニアラス其ノ軍備ノ如キハ、月二年ニ進歩擴張スルノ實アルヲ見テ、始メテ容易ニ侮ルヘカラサルヲ知り、時ニ偶々彼ノ清佛戰爭ノ起ルニ當リテヤ、其ノ勝敗如何ニアランカヲ凝視セシニ、忽チ鐵艦ハ破壊セラレ、砲臺ハ擊碎セラレ、清兵大ニ敗レタルノ報ニ接スルヤ、驟然トシテ彼レヲ輕賤スルノ氣焰ヲ増シ、幾クモナクシテ道光咸豐ノ悲劇ヲ再演スルナラント思ヒシニ、豈ニ圖ンヤ諒山ノ一舉、其ノ境ヲ將サニ敗レタルニ回復シテヨリ、佛軍

大ニ其ノ精銳ヲ折キ、浪戰ノ結果、曠日彌久、海上ニ困弊疲窮スルニ於テ、クールベト提督ハ之レカ爲メニ憤死シ、フエリー内閣ハ之レカ爲メニ交迭スルノ結果ヲ來タシ、清兵大ニ得色アルヲ見テ、再ヒ其ノ侮リ難キヲ思ヘリ、斯クノ如ク一時ノ勝敗去就ニ依テ、其ノ國百年ノ盛衰興亡如何ンヲ顧ミス、此ノ輔車唇齒相ヒ依ルヘキノ國ニ對シテ、其ノ修交スル所ヲ失ヒ、或ハ近時露國ノ勢力アルニ眩暈シテ、彼レト結ンテ英、清相ヒ結フノカヲ抑制スヘシト云ヘルモアレハ、或ハ支那ノ容易ニ侮ルヘカラサルヲ知り、彼レト反目乖離スルコトノ不利ナルヲ説クモアリ、昨是今非、一貶一褒、未ダ視聽ヲ煩ハスニ足ルモノアラスト雖モ、其ノ時々目前ノ風潮ニ隨テ、彼レニ對スルノ考案ヲ千變萬轉シ、以テ將來悠久ノ計圖如何ンヲ看破スルノ定見ナキニ至リテハ、餘リニモ其ノ思慮ノ淺薄ナルニ驚カスンハアラス

我カ法教ハ素ヨリ獨立ナラサルヘカラス、我カ法教ハ固ヨリ俗事ニ關ルヘカラス、依テ彼ノ外交政略ノ如キハ、縱ヒ如何ナル方針ヲ取リ、如何ニ怨親離合スルモ、敢テ是非ヲ説クヘキニアラス、然レトモ、事苟クモ興法布教ノ利害得喪ニ關スルモノアレ

ハ、其ノ法教ノ利害得喪ノ爲メニ、敢テ緘黙ニ付シ去ルヘカラサルコトアリ、且ツ夫レ法教ノ盛衰興廢カ、直チニ國家ノ存亡安危ニ關シ、國家ノ存亡安危ニ依テ、法教ノ盛衰興廢ヲ誘フコトノ實アレハ、其ノ法教ノ盛昌興隆ノ爲メ、鎮護國家ノ必要ノ爲メ、已ムナク法教家ハ法教家トシテノ覺悟ヲ定メサルヘカラス、又々齊ク海外布教ノ上ニ於テモ、其ノ利害緩急ノ存スル所ヲ講セサルヘカラス

最初ヨリ海外ノ布教ヲ企圖セサレハ去來知ラス、若シ之レヲ企圖スルニ於テハ、宜ク先ツ其ノ順序ヲ擇ハサルヘカラス、其ノ順序トハ、同教國ト異教國ト何レヲ先キニスヘキ乎、近邦ト遠邦ト何レヲ先キニスヘキ乎、富ノ程度高キ國ト富ノ程度低キ國ト何レヲ先キニスヘキ乎、トノ問題はレナリ、此ノ先後ノ順序ハ、宜ク彼此ニ於ケル國家ノ形勢ト、己レカ實力ノ能度如何ントニ依ルヘキモノトス、今マ此ノ諸種ノ要點ヨリ觀察スルニ、我カ法教家カ海外ニ布教セント欲スルニハ、先ツ支那ヲ擇ハサルヘカラス、若シ我カ法教家ノ實力ニシテ、既ニ充分ノ發達ヲ爲セルモノトセハ、直チニ泰西諸邦ニ向テ其ノ教田ヲ開拓スル素ヨリ可ナリ、然レトモ我カ法教家ノ實力未タ充分

ノ域ニ進ム能ハス、茲ヲ以テ支那ノ布教ヲ先キニスル時ハ、以上ノ諸點ニ於テ、總テ順序ノ宜キヲ得、且ツ泰西ノ布教ヲ先キニスルニ比シテ、頗フル効果ノ期シ易キモノアルヲ認ム

抑モ支那ノ布教ニ於テハ、富ノ程度、寧ロ生活ノ程度、泰西諸邦ニ比シテ低キカ故ニ、多分ノ費用ヲ要セサルナリ(其ノ一)支那ト日本トハ歷史上ノ緣故深く、且ツ其ニ舊時我カ法教ノ隆昌ヲ極メタル國柄ナレハ、其ノ能所ノ感應ニ於テ、異教國ニ布教スルノ比類ニアラサルナリ(其ノ二)我カ法教家ノ學問上ニ於ケル能力ハ、概テ漢譯ニ係レル經律論藏、及ヒ漢土撰述ノ諸疏論義ニ依テ養ハレタル者ナレハ、其ノ布教上ノ技術ニ於テモ、最モ適當シタル所アリ(其ノ三)支那ト日本トハ、輔車唇齒相ヒ依ルノ國柄ニシテ、其ニ完全ナル亞細亞ノ獨立國タル體面ヲ保ツモノナレハ、東洋問題ノ上ヨリ、國際上ノ親密ハ勿論、其ノ法教上ニ於テモ、其ニ彼此人心ノ共和親睦ヲ圖リテ、互ニ隔意猜心ナキノ國情ヲ開通スルノ媒介者ト爲ラサルヘカラサルノ必要アリ(其ノ四)以上諸種ノ理由ノ外、尙ホ最大必要ナル一事アリ、我カ法教將來ノ消長盛衰ニ

關スルコト是レナリ、彼ノ單ニ外交政略ノ上ヨリ、東洋ノ形勢ニ注目スルヲ以テ誇稱スル輩ノ如キハ或ハ、我カ國ノ露國ト相ヒ結ンテ、英國ト結ハントスル支那ニ敵スルヲ策ノ得タルモノナリト思ヘル者アリト雖モ、蓋ハ露國南下ノ雄圖ニ恐レテ、彼レカ歡心ヲ買ヒ、以テ目前ノ小康ヲ僥倖セント欲スルモノニシテ、未タ國家百年ノ長計ヲ慮リタル者ノ言ニアラス、我カ法教家ハ、專ラ法教ノ興廢存亡ヲ念トシテ、敢テ外交政略、東洋問題ナト云ヘルコトヲ呶々スヘキニアラサルハ、前言ノ如クナレトモ、彼ノ外交政略上ノ結果トシテ、我カ法教ノ盛衰汚隆ニ關係スルモノアルニ於テハ、其ノ引例トシテ一言セサルヘカラサルモノアリ

若シ我カ日本ニシテ露國ト相ヒ結ヒ、以テ支那ヲ疎ニスルコトアレハ、日、清、露ノ三國間ニ於テ、先ツ第一ニ撞着スヘキハ、彼ノ朝鮮問題ナラン、此ノ時ニ於テ彼ノ東洋ノ一大巨人ナル支那帝國、其ノ舊體ハ頗フル老ヒ、其ノ新體ハ未タ幼稚ナリト雖モ、容易ニ屈服スヘシトモ思ハレス、况ンヤ英國カ彼ノ中央亞細亞ノ爭地ニ於テ、露國ト相ヒ睥睨スルノ餘勢、及ヒ支那カ軍規訓練總テ英式ニ則ル等ノ關係ヨリ、大ニ支那ヲ

援クルヤ必セリ、此ノ際ニ當リテ、日露ト英清ト、相ヒ對峙頡頏スルノ曉ニ至ラハ、其ノ強弱勝敗ハ且ク措キ、東洋問題ハ如何ニ成行カントスル乎、此ノ廣袤長大ナル亞細亞洲中ニ、僅々ニ帝國ノ樹立ヲ見ル、而シテ二國互ヒニ反目抗爭シ、一ハ歐洲東北ノ一帝國ト結ヒ、一ハ歐洲西北ノ一王國ト結フ、茲ニ至リテ誰レト共ニカ亞細亞ノ面目ヲ保チ、誰レト共ニカ東洋ノ形勢ヲ談ラン乎

茲ニ於テ乎、是レ等ノ時機ニ突進シテ、彼ノ希臘教カ我カ日本ニ羽翼ヲ伸張セントスルノ虞ハナキ乎、彼ノ基督教ノ支那ニ蔓延スルノ憂ヒハナキ乎、是レ我カ法教家ノ猜疑杞憂タルニ過キササル乎、斯クノ如キ言ヲシテ、長ク猜疑杞憂ヲラシムレハ實ニ是レ幸ヒナリ、然レトモ、此ノ猜疑杞憂モ、更ラニ掃蕩シ去ルノ機運ニ達セシメスンハアラス、然ルニ彼ノ日、清、露、英間ニ於ケル怨親離合ハ且ク措キ、彼ノ各種ノ外教徒カ、堅忍不拔ノ精神ヲ以テ、着々我カ法教ノ郷土ヲ蹂躪セントスルコトニ勉ムルノ實アルハ爭フヘカラス、此ノ際ニ當リテ、我カ同一法教中、彼ノ南方諸邦ノ如キ、或ハ既ニ猛英強佛ノ爲メニ蠶食セラレ、或ハ氣息奄々トシテ僅カニ其獨立ヲ保チ、加フルニ小乘自

利ノ教、共ニ談ルニ堪ヘサルモノアリ、然ルニ其ノ國ノ獨立全キヲ得テ、而カモ大乘圓滿ノ教ヲ存セルハ、我カ國ト支那トアルノミ、今マニシテ兩國法教ノ連衡和融ヲ企圖セサレハ、何レノ時ニカ我カ佛陀ノ法教ヲシテ、永ク慈氏ノ下生ニ傳持スルコトヲ得ン、其ノ國風ノ然ラシムル所、彼ノ支那青黃二衣ノ教、其ノ徒概チ因循固陋ニ流レテ、時運ノ活勢ヲ看破スルノ明ヲ缺クト雖モ、其ノ温平タル德風、其ノ穆如タル道念ニ於テ、大ニ我カ師トスヘキ者アラン、我カ日本各宗ノ教、其ノ徒、輕佻急進ノ弊ヲ免レ難シト雖モ、大ニ時運ノ活勢ニ乘シテ、能ク機輪ヲ轉スルノ手腕アリ、一長一短、共ニ相ヒ輔翼スル所アラハ、一ハ我カ法教傳播ノ上ニ於テ、顯著ナル効益ヲ有シ、他ハ彼此ノ國際ニ對シテ、間接ニ共同平和ノ關鑰ト爲リ、以テ人心上ヨリ國家ノ獨立隆運ヲ裨補スルモノアラント思フ、是レ前項各種ノ理由ニ依リテ、支那布教ノ忽諸ニ付スヘカラサルヲ論述スル所以ナリ、茲ニ於テ乎先ツ漫リニ泰西ヲ崇拜シテ、強チニ支那ヲ輕蔑スルカ如キ陋見ヲ破リ、彼ノ東洋ノ一大巨人國、其ノ兵力産業共ニ久シク侮ルヘカラサルノ觀念ヲ養成セシメスンハアラス

第四節 内外ノ緩急。目下ノ急務

法教上ニ於ケル支那ト日本、固ヨリ親密ナラサルヘカラス、其ノ日本法教ノ進歩ヲ以テ、支那ノ法教ヲ啓發開導シ、以テ中古相傳ノ恩遇ニ酬ヒサルヘカラス、然レトモ、凡ソ百般ノ事、自ラ内外緩急ノ別アリ、前節論スル所ノ如キ、其ノ海外ニ布教スルノ上ニ就テハ、先ツ支那ヨリ始ムヘシトノ意ヲ示シタルモノニシテ、目下ニ於ケル我カ法教ノ形勢ヲ以テスレハ、海外布教ノ中、最モ容易ニシテ、最モ必要ナル支那布教ノ如キスラ、未タ相當ノ實力ニ堪ヘ難キモノアリ、何トナレハ、内整ヒテ後チ外ニ及フ、是レ自然ノ順序ナリ、顧フニ我カ國內ニ於ケル法教ノ形勢タルヤ、彼ノ北門ノ鎖鑰タル北海道ハ、土地茫邈、人口稀疎ニシテ、開拓ノ事業未タ創草ノ域ヲ出ツル能ハスト雖モ、其ノ前節既ニ掲クル所ノ如ク、其ノ面積大凡六千一百方里、即チ我カ國ヲ四分シテ其ノ一ヲ持ツヘキモノナルニ、寺院僅ニ一百九十箇ニ過キス、其ノ住職モ亦タ稍ク一百三十人ニシテ、創立未タ幾クナラサルニ、寺院全數ノ三分一強ハ、既ニ兼任又タハ無住タルノ現況ナレハ、其ノ局ニ當ル者、宜ク自警スヘキモノアリ、况ンヤ人口ノ稀

疎、自ラ是非ナキ次第ナリトスルモ、其ノ一箇寺ニ對スル面積ノ如キハ、三十二方里餘ニ涉リ、全國平均一箇寺ノ有スル面積ニ比シテ、幾ント百倍ノ廣サヲ有スルカ如キハ、同道將來ノ開拓ニ對シテ、頗ル注意スヘキコトナリ、更ラニ眼ヲ一轉シテ、我カ國南門ノ第一關タル琉球ノ如キハ、幾ント一百六十方里、三十七萬人ノ衆生ヲ導クニ、僅々十四箇ノ寺院ト、十三人ノ住職トヲ有シ、其一箇寺ニ對スル面積ノ十一方里ナルハ、北海道ニ比シテ猶ホ忍フヘシトスルモ、其ノ住職一人ノ教導スヘキ人口ハ、二萬八千六百餘人ノ多キアリト云フニ於テハ、其ノ全國平均住職一人ニ對スル人口ノ三十六倍強ヲ有スルモノナレハ、其ノ海外ニ布教スルノ餘力アルカ如キンハ、宜ク先ツ國內南北ノ二門ニ向テ、其ノ布教ヲ圓滿普及スヘキナリ、内外ノ緩急夫レ擇ハサルヘケンヤ

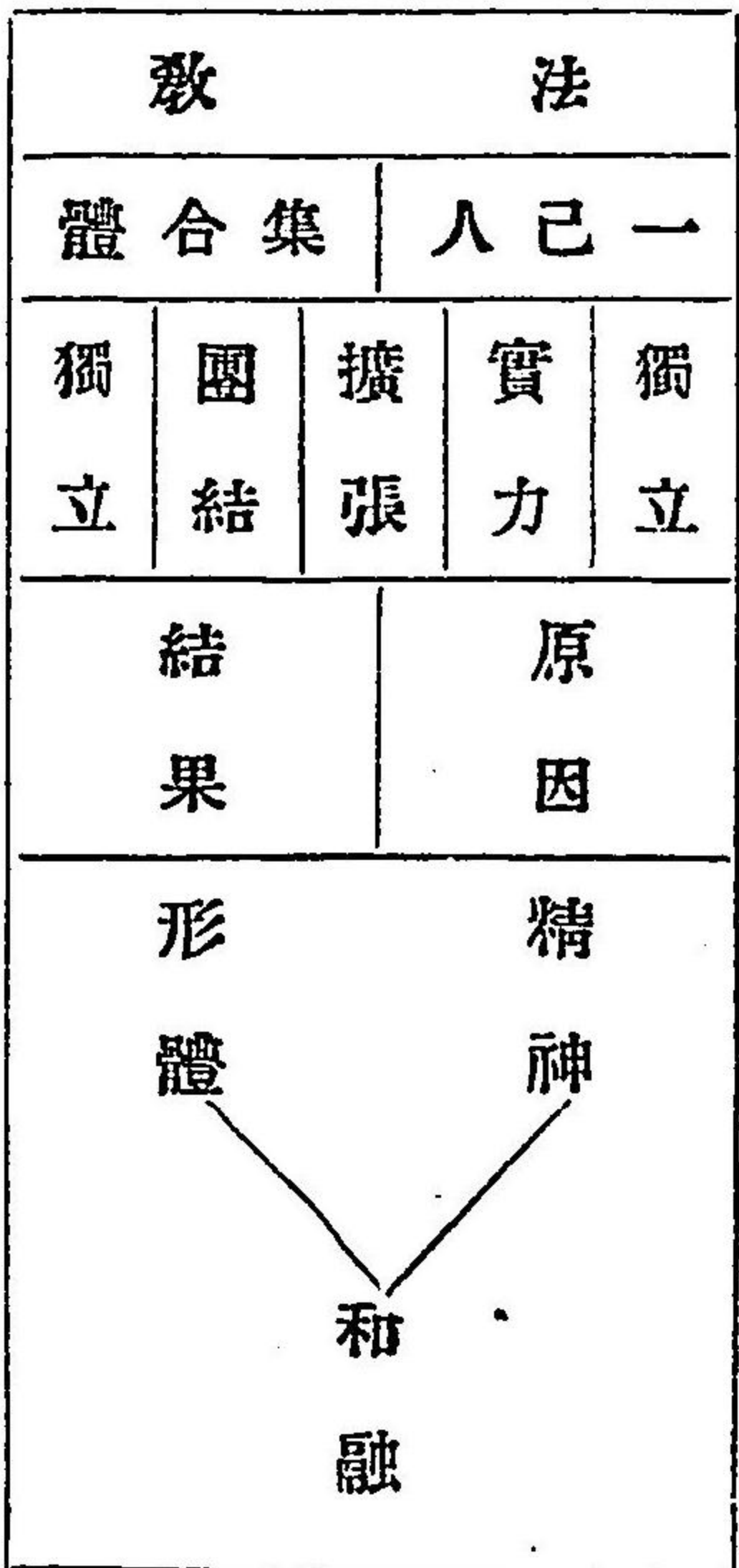
内外ノ緩急、斯クノ如ク其ノ順序ヲ擇ヒ、我カ國南北二門ニ於ケル布教、斯クノ如ク忽諸ニ付スヘカラサルモノアルト共ニ、其ノ國內ニ於ケル布教手段ニモ、亦々自ラ其ノ緩急ノ擇フヘキモノアルコトヲ知ラサルヘカラス、體內腹部衰弱疲勞シテ、首尾手

足焉ノ強健壯快ナルヲ得ン、我カ國ノ首尾タル南北ノ兩端、如何ニ氣力ヲ充溢シテ強健壯快ナル活動ヲ爲サントスルモ、其ノ體內腹部タル内地ニシテ、衰弱疲勞スルカ如キハ、如何ニシテカ其ノ企望ヲ達セン、若シ此ノ理勢ヨリ推究スル時ハ、北海道及ヒ琉球ト、本州及ヒ四國九州等トハ、比較的内外ノ緩急ノ如キモノナクンハアラス、是レニ由テ之レヲ觀レハ、我カ法教目下ノ急務ハ、宜ク内地ニ於ケル實力ヲ充溢シ、以テ法教獨立ノ基礎ヲ堅牢ナラシメ、次第ニ其ノ實力ヲ擴張シテ、以テ内外ノ布教ヲ勵ミ、而シテ將來悠久ニ法教獨立ノ體面ヲ完全ナラシムルニ在リ、彼ノ神道中ノ奇怪的神道ヲシテ、其ノ怪力ヲ湮滅セシメス、彼ノ各種ノ外教ヲシテ、今日アルヲ致サシメ、法教各宗、共同、競争ノ力ヲ失ヒ、漫リニ兄弟牆ニ鬩キ、或ハ尸位素餐ナルカ如キハ、我カ日本法教ノ今日ニ處スル所以ニアラサルナリ

第三編 實力。擴張。團結。獨立

著者ハ既ニ前編ニ於テ、日本法教家ノ任務ヲ論スルニ當リ、日本法教ノ意義ヨリ、法教家ノ本分、及ヒ覺悟ヲ論シ、遂ニ法教獨立ノ方法如何ノニマテ論及シタリ、茲ヲ以

テ、愈々本編ニ於テハ、着實實際、畢竟如何ニシテ我カ日本ノ法教ヲ獨立セシムルコトヲ得ヘキヤト云フノ要點ヲ切論シテ、以テ本論ノ大局ヲ結ハント欲ス、先ツ其ノ論要ヲ標示セハ左ノ如シ



若シ我カ日本現今ノ法教ニシテ、尋常ナル機運ニアルモノトセハ、其ノ實力、擴張、獨立ト云ヘルカ如キコト、一ニ法教全體ノ上ニ於テ行ハルヘシ、然ルニ本論第一卷既ニ痛論シタル如ク、其ノ時弊最モ甚シフシテ、法教ノ運動機關ハ概テ其ノ中心點ヲ失却セルノ今日ナレハ、其ノ公ノ運動ト、私ノ運動トヲ問ハス、又タ宗派的運動ト、法教的

運動トヲ論セス、直ニ其ノ集合體ニ向テ之レカ運動ヲ圖ラントスルカ如キハ、幾ント効力ナカラントス、否ナ縱ヒ何分ノ効力アルモノトスレモ、其ノ効力ハ最モ遲緩ニシテ、最モ薄弱ナルコトヲ豫知シ、先ツ一己人ノ運動ヨリ始メテ、漸次ニ集合體ノ運動ニ及ホシ、以テ法教全體ノ獨立ヲ期セサルヘカラス、是レ法教獨立ノ畫策ニ於テ、先ツ擇フヘキノ順序ナリトス

一己人ノ運動ハ先ツ自ラ獨立スルコトヲ要ス、先ツ自ラ獨立スルハ、依賴卑屈ノ精神ヲ起サ、ルニアリ、既ニ第二、第三ノ卷ニ於テ、法教ノ盛衰興亡アル所以ヲ論シタルカ如ク、凡ソ法教家タル者ニシテ、先ツ自ラ獨立スル者アルノ世ニ在テハ、法教自ラ隆昌ニ赴キ、其ノ法教家タル者ニシテ、自ラ依賴卑屈ノ境界ニ墮スル時ハ、法教毎ニ衰亡ニ傾ク、昭々乎トシテ是レ古今ニ明カナリ、著者カ本論ニ於テ、先ツ其ノ時弊ヲ痛論シ、尋テ法教變遷ノ要點ヲ切論シタルモノ、豈ニ他意アラシヤ、切ニ現今及ヒ將來ノ法教家ヲシテ、既往ニ照シ、現今ニ鑑ミ、以テ深く將來ニ推ス所アラシメシメカ爲メナリ

既ニ先ツ自ラ其ノ精神ヲ獨立ス、是レ彼ノ發心又タハ立志ト云フノ境界ニ達シタルモノナリ、其ノ精神ノ獨立シテ、堅牢不拔ナルカ如キハ、形體上ノ實力、又タ隨テ養成スルコトヲ得ルナリ、若シ精神ニシテ獨立セザレハ、動モスレハ他ノ奴隸ト爲リ、黃白ノ爲メニ眼ヲ眩シ、利欲ノ爲メニ生涯ヲ誤ル、然ルニ縱ヒ精神ハ如何ニ獨立スト雖モ、若シ形體上ノ實力アリテ、其ノ精神ノ獨立ヲ助クルニアラザレハ、徒ラニ雄心客氣ノ爲メニ制セラレテ、動モスレハ輕舉妄動ヲ企テ、又ハ亂心狂氣ノ人ト爲リテ、自ラ一身ヲ救フヘカラサルノ坑陷ニ陷レ、且ツ世間ヲ害毒スルニ至ル、然レトモ、其ノ形體上ノ實力ノミ強大ニシテ、其ノ精神ノ獨立薄弱ナルカ如キハ、既ニ第一卷ニ論述シタル所ノ如ク、或ハ守錢奴ト爲リ、或ハ投機商ト爲リ、或ハ偽英雄ト爲リ、或ハ無賴漢ト爲リ、或ハ佞奸人ト爲リ、或ハ傀儡師ト爲リ、或ハ又タ自侮、自尊、情實、銅臭、摸倣、因襲等ノ陋弊ニ墮シテ、貴重ノ一生ヲ醉生夢死ノ間ニ終ルノ悲境ヲ現スルヲ免レズ、二者共ニ完全具備センコトヲ勉メサルヘカラス

既ニ一己人トシテ獨立ノ精神ヲ發揚シ、實力ノ形體ヲ具備セハ、之レヲ擴張シテ、廣ク集合體ニ及ホシ、以テ集合體上ノ實力ヲ養成セサルヘカラス、凡ソ擴張、團結ノ力ナルモノハ、其ノ運動ヲ強大活潑ナラシムルニ於テ、實ニ必要必須ナルナリ、彼ノ毛利束箭ノ比喻ノ如キ、素ヨリ集合體ノ必要ヲ示スニ過キス、近クハ彼ノ大谷派本願寺兩堂再建工事ニ使用セル毛綱モウキウルモモヲ見ヨ、人、其ノ輕キヲ云ヘハ、先ツ毛ヲ云ヒ、其ノ細キヲ云ヘハ、先ツ髮ヲ云フ、彼ノ一絲ノ毛、一莖ノ髮、將タ幾許ノ力勢カ是レアラシ、然レトモ、彼ノ最モ輕ク、最モ細キ物ヲ集メ、糾フテ毛綱ト爲スニ於テハ、九牛ヲ牽テ尙ホ切斷スルコトナク、萬斤ヲ釣テ尙ホ支持スルニ餘リアリ、彼ノ本願寺ノ毛綱ノ如キハ、總テ五十三筋アリ、而シテ其ノ最モ長キハ、三十一丈五尺ニ及ヒ、其ノ最モ短キモ、七丈五尺ニ下ラス、其ノ總延長ハ、四百五十二丈八尺アリ、而シテ其ノ最モ太キハ、一尺三寸周圍ニ及ヒ、其ノ最モ細キモ、四寸周圍ニ下ラス、且ツ其ノ最モ重キモノハ、二百八十貫目ヲ有シ、其ノ最モ輕キモノト雖モ、尙ホ十貫目ニ下ラス、而シテ其ノ總量目ハ、千六十一貫六百五十目ヲ有スト云ヘリ、嗚呼、其ノ最輕最細ノ物ヲ以テ、斯クノ如キ重大強勢ノ物ヲ製ス、集合體ノ勢力、豈ニ恐ルヘキモノニアラス

ヤ、是レ我カ國法教信徒、殊ニ其ノ信女々々、自ラ梳リテ一寸モ長カラシムコトヲ欲
 シ、自ラ髪ヲ一莖モ多カラシムコトヲ欲スルニシテ、其ノ最モ愛スル所ノ毛髮ヲ斷シテ、此ノ
 重大強勢ノ物ヲ棄スルヲ要スルニシテ、日本ノ法教、衰ヘタリト雖モ、焉ンツ輕忽ニ失
 望落膽スルヲ爲ヒン、唯タヘキハ、之レカ擴張團結ヲ圖ルコトヲ知ラサルニ在
 リ
 一己人ノ獨立、實力、如何ニ堅牢ナリト雖モ、其ノ法教全体ヨリ觀察スレハ、猶ホ一絲
 ノ毛髮ノ如ケン、將タ何事ヲカ爲スニ堪ヘン、然レトモ、重大強勢ノ毛綱ハ、素ト是レ
 一絲ノ毛髮ヲ離レテ、外ニ求ムヘキニアラス、爰ヲ以テ、若シ結合ノ要素ト爲ラハ、一
 人二人尙ホ捨ツヘキニアラス、若シ游離飛散スルニ於テハ、千人萬人何ソ恃ミトスル
 ニ足ランヤ、日本法教獨立ノ方策ハ、先ツ一人二人ヲ捨テサルニ在リ、一人二人ヲ捨
 テサルハ、之レヲ擴張シテ、千人萬人ヲ得ルノ道ナリ、千人萬人ヲ得ルノ要ハ、之レヲ
 團結シテ、共同一致ノ運動ヲ爲スニ在リ、若シ共同一致ノ運動ニシテ、完全ナル奏功
 ヲ得ハ、茲ニ始テ我カ日本法教ノ獨立、完全鞏固ナルコトヲ得ン

要ヲ取テ切言スレハ日本法教ノ獨立ヲ圖ラント欲セハ先ツ自ラ獨立ノ精神ヲ發揚ス
 ルニ在リ、次ニ形體ノ實力ヲ養成スルニ在リ、一己人ニ於ケル獨立ノ精神ヲ發揚スレ
 ハ、己レ先ツ依賴卑屈ノ境ニ落チス、一己人ニ於ケル形體ノ實力ヲ養成スレハ、己レ
 先ツ虛勢空論ノ弊ニ入ラス、然レトモ、一人一箇ノ勢力ハ、自ラ孤立退縮ノ弊ニ墜ツ、
 故ニ宜ク之レヲ擴張シテ、其ノ勢力ヲ強大ニセサルヘカラス、夫レ唯タ擴張スト雖ト
 モ、之レカ團結ヲ鞏固ニセサレハ、猶ホ積聚セル毛髮ノ未タ糾ハサルカ如ク、其ノ勢
 カヤ薄弱ナリ、依テ團結ヲ鞏固ニスルコトヲカムヘシ、而シテ一己人ノ集合體ニ對ス
 ルハ、猶ホ原因ノ結果ニ對スルカ如ク、集合體ノ一己人ニ對スルハ、猶ホ結果ノ原因
 ニ對スルカ如シ、原因、結果、相ヒ待テ始メテ真正ナル法教ノ獨立ヲ得ルナリ、而シ
 テ其ノ最モ要スル所ハ、一己人ト集合體トヲ問ハス、其ノ精神ト形體トノ圓滿和融
 スルコト是レトモ、縱ヒ形體ヲ存スルコトアルモ、若シ精神ノ缺クル所アラハ、是
 レ煎リ、豆ノ萌サ、ルコト如シ、精神ニ充溢スルアルモ、若シ形體ヲ存セサレ
 ハ、是レ依草附木ノ精靈ナルノミ、二者並ニ用テ爲スニ堪ヘン、故ニ法教獨立ノ

道、先ツ一己人精神ノ獨立ニ始リ、法教全體ノ獨立ニ終ル、其ノ兩端ヲ聯絡スヘキ、實
力、擴張、團結ノ三者、夫レ要セサルヘケンヤ、而シテ今マハ先ツ其ノ一己人ヲ要ス、
其ノ一己人トハ誰ツ、凡ソ日本法教家タル者、人々各々即チ是レナリ

立教大論完

明治廿四年八月卅一日印刷
明治廿四年九月一日出版

正價金四拾錢

版權登錄

著者兼
發行者
日本法教獨立會代表者

村上泰音

東京市深川區
清住町廿貳番地

島連太郎

東京市京橋區
西紺屋町廿六番地

日本法教獨立會本部

東京市深川區
清住町廿貳番地

秀英舍

東京市京橋區
西紺屋町二十六七番地

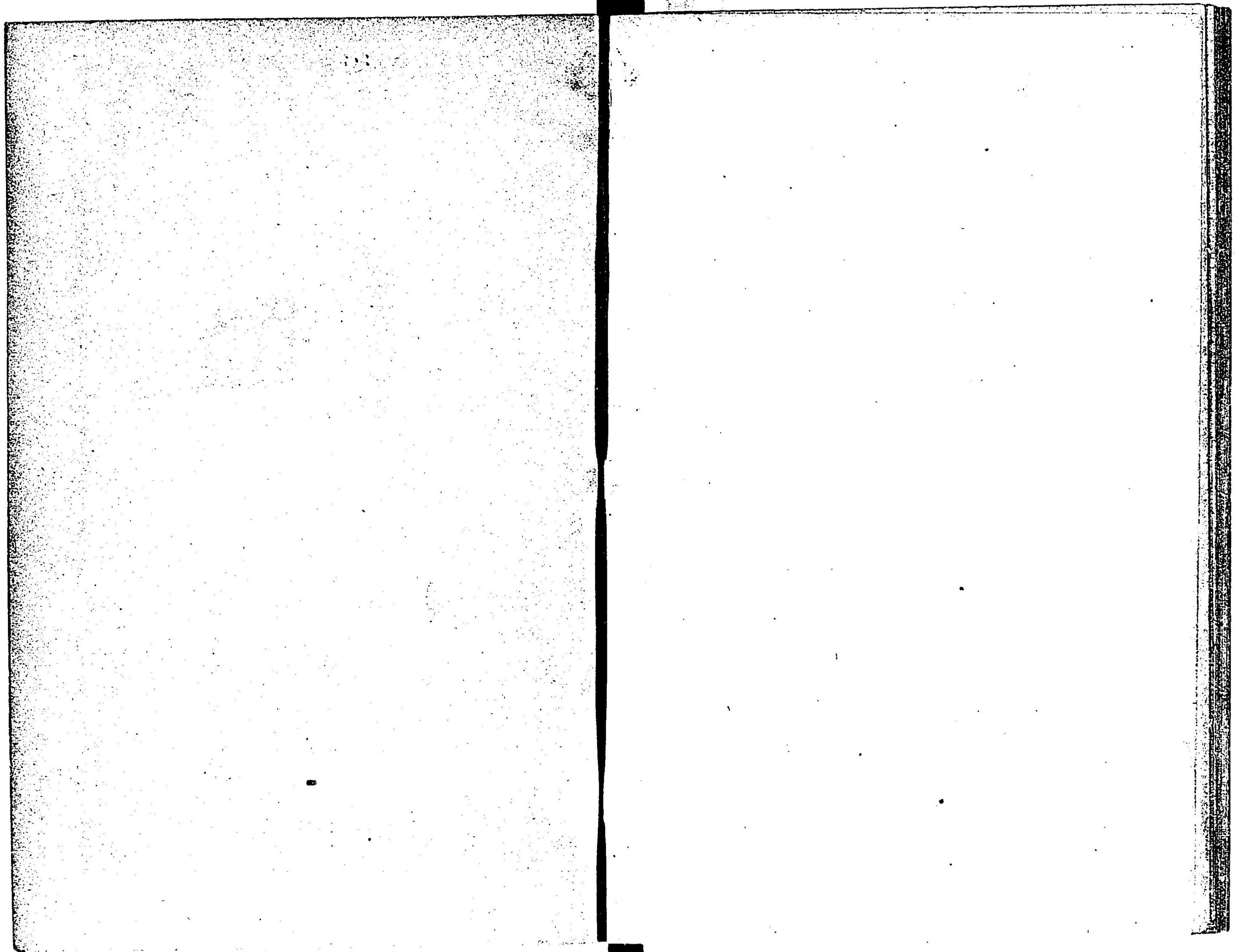
版權所有

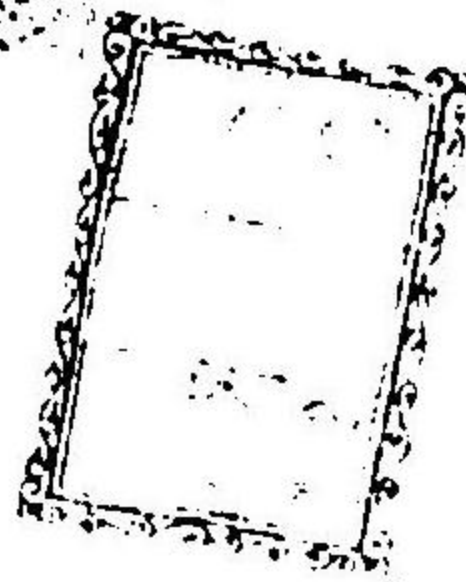


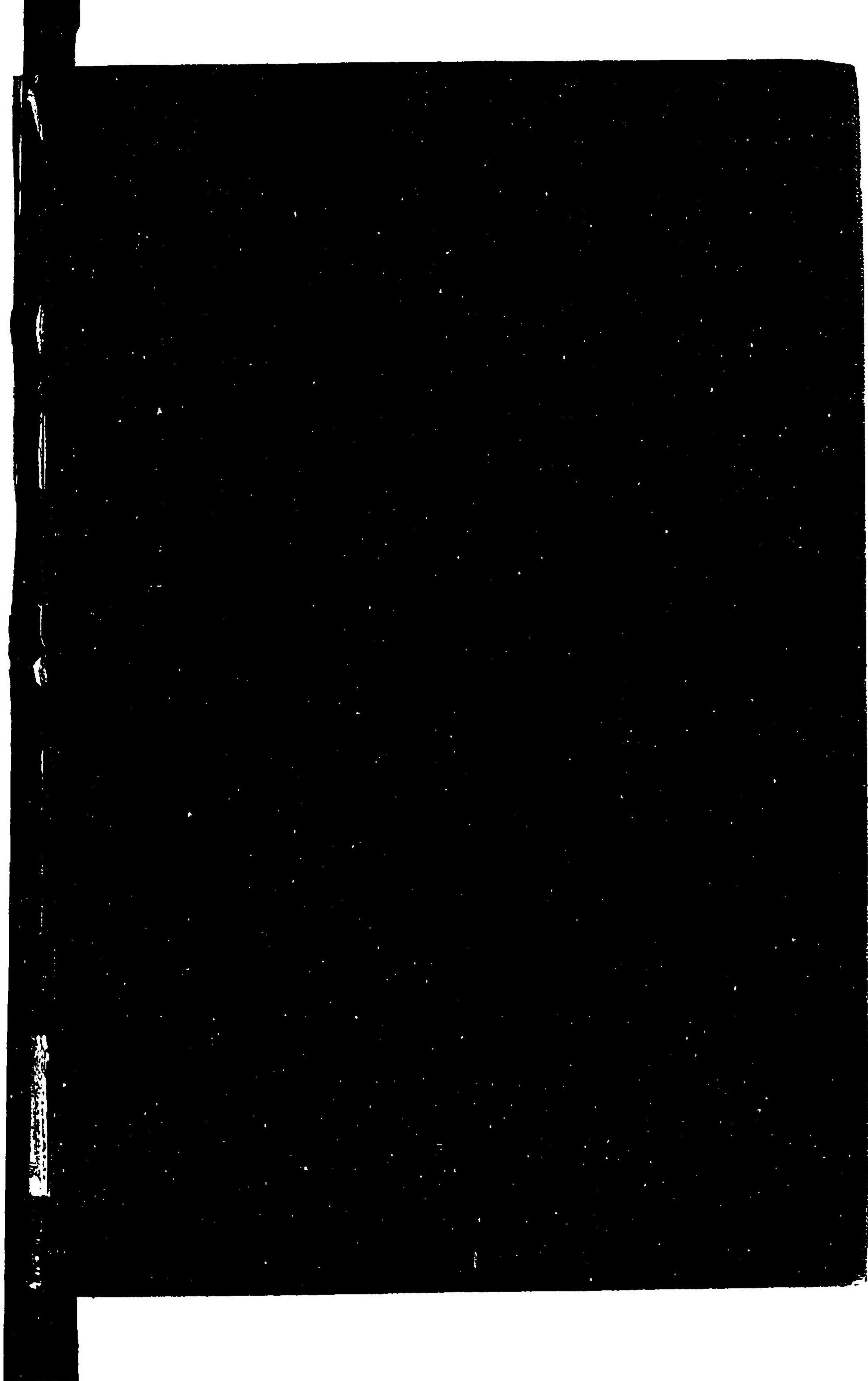
印刷者

發行所

印刷所







68
77

013779-000-2

68-77

立教大論

村上 泰音 (洪雨軒) / 著

M24

ABA-0269

